修正十五版

吉田彌平
編

中學國文教科書 卷十

東京
光風館藏版

教科書文庫
4
810
41-1923
2000302017

41783
教科書文庫
4
810
41-1923
200030
2017

教科書文庫
4
810
41-1923
2000302017

文部省檢定濟
大正十二年十一月十六日　中學校國語科教科書

吉田彌平編

中學國文教科書

東京　光風館藏版

広島大学図書
2000302017

資料室
376.9
Yo 19

中學

國文教科書 卷十

目次

一 文學と人生……藤井健治郎 一頁
二 柳綠花紅……藤岡作太郎 一五
三 山の溫泉から……吉田紘二郎 三
四 平和の巴里……島崎藤村 二七
五 百蟲譜……横井也有 四〇
六 小松內府……四四
七 寂光院……五六

廣島大學圖書之印

廣島大學 教 21668 圖書

八　平家雜感……高山樗牛　六六
九　上古の文學
第一　祝詞……七三
第二　歌謠……七六
第三　歷史……八三
一〇　二本松……八七
一一　光賴卿の參內……九一
一二　幻住庵の記……松尾芭蕉　一〇〇
一三　國ざかひ……一〇六
一四　世界の四聖その一……高山樗牛　一〇七
一五　世界の四聖その二……高山樗牛　一一九

一六　明治時代の文學……佐々醒雪　一二四
一七　人生の快事その一……三宅雪嶺　一三四
一八　人生の快事その二……三宅雪嶺　一四一

目次終

廣島大學圖書之印

藤井健治郎
倫理學者
文學博士
京都帝國大學教授
明治四年生

中學國文教科書 卷十

一 文學と人生

藤井健治郎

諸君、文學とは何であるか。文學は人生の縮圖である。人生と云ふ海の様に廣いものゝ上に現れた百般の姿を鏡の如き狹いものゝ上へさながらに描寫したものが文學である。さらば人生とは何であるか。よく世間では「禍福は糾へる縄」などと言ふが、人の運命は啻に糾へる縄の如きのみではない。彼の大空に横たはれる雲のやうに、あるかと

見れば消え、消えたかと見れば涌き、海かと見れば山、龍かと見れば虎、乍ちにして淡く、乍ちにして濃く、變幻出沒殆ど端倪すべからざるものである。たゞ此の一片の雲でさへ少からず吾等の感興を惹くものを、それよりも更に奇妙で、更に變化ある此の人生の波瀾・動搖が、どうして吾等の感興を惹起さずにあらう。變幻出沒極りないのが人生の姿である。これが人生であるかと見れば忽ち其の姿をかへ、それが眞相かと見れば又忽ち消えて跡を晦ます。凡手は容易にこれを捉へることが出來ず、凡眼はなか〳〵其の眞相を認めることが出來ない。しかも捉へることがむづかしければむづかしいほど、認めにくければ認めにくいほど、之を

雅邦
橋本雅邦
畫家
東京美術學校教授
明治四十一年卒
年七十四
瀟湘八景
平沙落雁
遠浦歸帆
山市晴嵐
江天暮雪
洞庭秋月
瀟湘夜雨
煙寺晚鐘
漁村夕照

捉へたい、認めたいと思ふのは、誰しもの人情である。然るに詩人といふものは其の鋭敏な眼と靈妙な腕とを以てその認め難い人生の眞相をしつかりと捉へて來て、それを世人の前に示すのである。是が文學である。そこで世人は堪らない。自分の熱望の目的物が眼前に現れるから、人の視線は之に吸ひつけられ、觀ても觀飽く事を知らないのである。

私は文學は人生の縮圖であると云ふ。その大體の意味は前に言つた通であるが、猶茲に一つの疑が殘つて居る。それは外でもない。その縮圖とはどういふ意味であるかといふことである。雅邦の描いた瀟湘の八景は彼の洞庭湖

邊の大觀の縮圖である。又長沙あたりで賣つて居る寫眞もやはり同じ縮圖である。寧ろ寫眞の方は實際の通り一木一石少しも實際のものと違はず寫されて居るが、雅邦の描いたものはさうでない。精密に見れば、實際に生えて居ない木が生えて居たり、實際にある巖が省かれて居たりするであらう。併しながら兩者共に彼の大觀の縮圖たるに於ては同一である。文學は人生の縮圖であると云ふ。縮圖は彼の繪畫的縮圖の意か、寫眞的縮圖の意か。是が殘つて居る問題である。此の問題は一刀兩斷に答へる事が出來る。凡そ文學とあらん程のものは必ず繪畫的の縮圖であり、又あるべきもの

たることは疑ないと思ふ。成程唯縮圖といふ點より見たならば、寫眞の方が遙に精密な縮圖であらう。併し今少し他の點から考へれば、さうではないのである。凡そ物には要といふべき點がある。其の要を捉へさへすれば、其の他は之をあぐる必要もなく、否むしろ擧げない方がよいのである。實際の物には穢い所もあり、醜い處もある、また不完全な處もある。必要の點以上に此等のものをも殘らず擧げるときには、却て吾等の感興を害ひ吾等の想像を破つて、彼の湖邊の美を發揮しようとした折角の努力も失敗に終るのである。されば唯湖邊の美觀の肝要な場所をば極めて精采あるやうに描いて、其の他はすべて觀者の想像に任

せる方が、その美觀を眞に發揮する所以である。故に美を發揮する方からいへば、繪畫的縮圖こそ眞成の縮圖である。そこで此の人生百般の姿を捉へて吾等が美的感興の對象となし、美的趣味を滿足せしめようと云ふ文學は必ず繪畫的縮圖たり又たるべき事は殆ど絮說するの必要もないと信ずる。

諸君、文學とは何であるか。文學は人生の救である。

凡そ吾等に苦み惱みのあるのは「我」といふものがあるからである。「我」あるが故に空しき望を起し、限なき欲を逞しうせんとするのである。「我」あるが故に限なき名聞の奴となり、限なき黃金の僕となるのである。「我」あればこそ憎惡もあり、怨恨もあるのである。名聞の奴となり黃金の僕となり、憎惡怨恨の焰に燃さるればこそ此の世に苦みといふものはあるのである。されればこそ菩提樹下に大悟徹底せられた大聖も「我」を以て一切苦の根本となされたのである。若し吾等にして我執を離れ、妄見を脫するを得たならば、吾等の意は如何に安らかに、吾等の情は如何に爽かであらう。而して吾等をして此の我執を離れ、妄見を脫せしむる所の易行道は何であるか。そは文學に外ならぬのである。吾等が美はしい詩や歌を吟詠し、戲曲・小說を閱讀する時には、全く一種の別天地に移つて、一切の我執・妄見は茲に全く消滅し、讀みゆく己、讀まるゝ文學、一つに融けて差別もなくな

り、唯何とはなしに怡悅滿足の思をするものである。しかもこれは啻に一時の救のみでなく、永く吾等が生涯に影響を及ぼすものである。もとより獨り文學と謂はず、其の他の藝術も、皆吾等を靈化する力をもつて居るには相違ない。併しながら音樂なり、繪畫なりは、割合に專門的・技術的要素が多く、何人でも其の力に縋つて救濟を得るといふわけにはいかない。然るに文學にはその要素が少い。其の文字と文章とを解し得る人ならば誰でも多少の救を受けることが出來る。是、私が文學は解脫の易行道であるといふ所以である。

凡そ吾等人間を救濟するものが三つある。第一は只今述

分け登る
分け登る麓の道は多けれど同じ高嶺の月を見るかな

べた所の文學の力で、第二は道德の力、第三は宗教の力である。文學は感情によつて直觀的に救濟の任務を果さうとし、道德は意志によつて漸進的に救濟しようとし、宗教は其の中間に立つて、半面は情により半面は意志によつて救濟せんとするものである。此の三者は此の如く分け登る麓の路に於てこそ違へ、つまりは同じ高嶺の月を見んとするものである。かやうに考へれば、その何れの道によつて救濟を求むるも其の人々の自由であつて、必ずしも己に同じき者に黨して異なる者を伐つの必要がないことは明かである。然るに世人は此の事を忘れて、所謂文藝派の人々と所謂道學派の人々と相鬩ぐが如き愚を演じて居る。

併し斯く言へば、或は「唯文學のみにより、もしくは道德のみによつて、果して全き人格の救濟が得られようか。」と問ふ者があるであらう。　私は必ず之を可能であると信ずる。　眞に美なるものは又必ず善を兼ね、眞に善なるものは又必ず美を含んで居るものである。　即ちカロースは必ずアガトンを兼ね、アガトンは必ずカロースを含んで居るものである。　善を兼ねざる美なく、美を含まざる善はない。　これは必ずしもヘラス民族の經驗ばかりではない、又吾等の親しく經驗するところであると思ふ。　されば眞に美なる文學によつて救濟せられるものは人格全體の救濟であり、眞に善なる法則によつて救濟せられるものは矢張人格全體の

一絶

乾坤無地卓孤錚、喜得人空法亦空。珍重大元三尺劍、電光影裏斬春風。

救濟であると思ふ。

諸君、文學とは何であるか。　文學は人生の力である、

將に虜酋の刃の下に非業の最期を遂げなんとせる禪僧祖元が纔に生命を全うするを得たのは果して何の力によるか。　彼が死に臨んで泰然として吟詠した一絶の力ではないか。　幾多幕末の志士をして感奮興起せしめた東湖の正氣歌は今日猶凜として生氣あり、眞に儒夫をして起たしめるの概があるではないか。　徒に理想とやらにあこがれて、老いたる父母にさん〴〵歎を見せ、後でやつぱり其の父母が慕はしくなつて現實界に還つて來た新曲浦島の太郎は、熱血涌きかへる多くの青年に向つて、理想は現實を離るべ

からず、唯此の現實界をさながらに淨土と觀じ、極樂と化すべきものであるといふ信念を鼓吹したのではなからうか。涙に沈める婦女、貧に苦しめる青年をして、再び生氣を呼起し蘇生せしめるものはすべてこれ文學ではないか。文學は人生の力である。此の力を得て此の力を利用せんとし、此の力によつて其の天福に與らんとする努力は、凡そ人間の努力中にあつて、最も神聖な、最も高い努力の一つである。宗教家が其の力を利用して自己の信ずる所の福音を傳へ、政治家が其の力を利用して經世濟民の具としたこと、古今東西其の例に乏しくないのである。

實に文學は人生救濟の具として道德・宗教と並び立つ者である。從つて彼等の間には互に相聯絡交渉する所がある。而して文學の力の最も直接に其の影響を及ぼす方向は道德の方面である。今文學創作者の立場からでなく、社會現象の一つとして文學を見るときには、其の影響は直接又は間接に、益〻道德を助け道德を高尚にするか、若しくはその反對に直接又は間接に、道德を破り之を墮落せしむるかといふ問題に歸着する。

かやうにいろ〳〵の影響があるから、見る人によつて文學の批評も違ふ。老人は「近頃の小說は實に風敎を害するの甚だしいものである。あれは絕對に禁止せねばならぬ。」といひ、青年輩は「美は美である。風敎と藝術とは世界が違ふ。」

といつて、現代の作物を歡迎する。いかにも青年の云ふ樣に、美は美の繩張があるから、一概に風敎云々を以てこれを律することは出來ぬ。さればと云つて、現代の作品をのみ追つて居て、更に高尙な作物のあるのを遺れて居るが如きはこれ亦贊成することが出來ぬ。文學と風敎との關係問題は、理想境に達しない現實の人生に於ては、つまる所一時の社會政策上の問題である。現今の道德に悖戻するが如き文學は、之を禁止するのも政策上已むを得ないことであらう。併し又一般讀者の趣味が漸々微妙に、漸々高尙になるならば、文學上の作品も漸次理想に近づくことであらう。結局理想は善美一致の境にあるのである。（時代思潮）

藤岡作太郎
國文學者
文學博士
東京帝國大學文科大學助教授
明治四十三年卒
年四十一

二　柳綠花紅

藤岡作太郎

遊子學んで二十餘年、たゞ惑に溺れ、
既に現在に飽いてまた當來を懼れ、
疑惧煩悶、衣食も安からず、
ひとり一个の笠に苦みの頭を包みて、
千年年每に新なる舊都の春にさまよへば、
柳綠花紅更にわが胸を傷ましむるかな。
比叡の麓にわたれる霞は、近く春風に匂ひ、
愛宕の嶺を越せる雲雀は、俄に脚下に墜つ。

指さす方に繪と見ゆる祇園・清水・三の峰、
塔影小さきところ、色ほのかなる男山。
麥隴菜畝歷史の印を殘さゞるはなく
無常迅速いづれも涙の跡なるよ。

安養淨土の法成寺もあはれこの淺茅原と、
雙が岡の隱僧が昔語りも夢なりや。
木幡の外山松柏空しく薪と摧かれぬ。
二十年の榮華は沙羅雙樹の花の色。
六波羅殿はたゞ洛東に名を留むれども、
慘澹たる經營蜻蛉の命と共に何か殘れる

法成寺
藤原道長ノ建テタ寺
隱僧
兼好法師

金城鐵壁の迹、桃の花うつろひて、
春草萌ゆる處たま〳〵瓦片ぞ散りぼひたる。
伏見・桃山幽鳥の囀るに任せて、
四海併呑の雄圖も淀の水泡と消えたりや。
あゝ英雄の事業、大は即ち大なれど、
「時」の前にはたゞ風前の燈火。

悲しきかな、生滅の鬼は日に〳〵人を餌として、
惠も罪も愛も望も旭の霜と解け去りぬ。
英傑の遺業消ゆるは卒都婆の文字より早ければ、

爲すなき一生、あなかなしや。
秋風吹けば、梢の木の葉ちり〳〵に、
互に急ぎ相逐ひて、もとの土にぞ歸るなる。
消ゆる待つ間の露とこの身を思へば、
恐は刻々にわが肉を削り去り、
すわる茵はうき雲の絶えずぞ搖るゝ、
いづこか驕傲なる「時」のかひなさを嗤ひ、
永劫の片はしをわが隱れ家として、
不變の呼に慰樂の聲を求むべき。

宇治の浮舟流るゝ跡の消ゆる如、
はかなく過ぎし五十餘帖の物語、
やさしき筆をたどりにし主は淑女の名のみして、
若紫の色はあせ、匂は殘る九百年。
繙く人はあやしく墨の香に醉ひて、
わが身をもうき世の事をも忘るなる。
わが世を捨てゝ文學の野に分け入れば、
樹々も千草も花咲亂れ、實なりこぼれ、
くしき女神の眞玉なす手に招くなる。
時もや過ぐる、世もや歷る、常なき事の忘らるゝ。

蓬萊・瀛洲もたゞ詩人の想より。
人こそ朽つれ、筆の命毛永くこそ。

補陀落や岸うつ波とくりかへす
東寺の禮讃振鈴聲すみて、そゞろ涙ぞ進むなる。
幾千人か祈るなる遍照金剛の聲々の
一息づつに大師の御姿現はるゝ。
この世の限なり出でん人の心に刻まるゝ。
尊き碑、時の嵐もいかにせん。
英傑は我のみ立てゝ世人を土埃と散らし。

補陀落や
補陀落や岸打つ
波は三熊野の那
智の御山にひゞ
く瀧津瀬

大聖は我を空しうして世人の爲に棄つ。
英傑死すれば世人は背き去つて顧みず。
大聖世を去れども世人は幾度もまた大聖たり。
生死流轉はわが前に雲煙よりも淡く、
眞如實相の月ぞ長へに明かなる。

宗教は秋山の下氷壯夫、文學は春山の霞壯夫。
これは櫻花の散りては年々に色鮮かに、
かれは常磐の松の千歳も數ならず。
濁れるを清くし、疑へるを信ぜしめ、
うたかたの世より無限の仙境に誘ふ、

あはれはらからこの同胞よ、（東圃遺稿）

三　山の溫泉から

吉田絃二郎

吉田絃二郎
本名ハ源次郎
文學者
明治十九年生

四五日前、また山の溫泉に來ました。今年はやつと夏が過ぎ去つたばかりだのに、いつもの神經痛が起つて來ましたので、毎日湯に浸つて居ます。

山には已に秋の色が漂つて居ます。一枚々々の葉が光つて居ます。朝と夕暮にはきまつて雨が湯の町を洗つて山を越えて行きます。

こゝの町では今夜が明月だといつて、芒の穗などを川のふちから手折つて來て居ます。

山の月はまた驚くほど澄んで居ます。白い雲が山から出ては山に隱れて行くのを見て居ると、子供のころのことなどが思ひ出されます。

私は月を見がてら古い寺の山門をくゞつて行きました。丁度夜のお勤が始つて居るところでした。八九人の坊さんたちが須彌壇の前を輪を作つて廻りながら、讀經をして居ました。水のやうな月の光が高い窓から御堂の中に流れ込んで居ました。そこには暗い柱のかげに一人の雛僧が合掌して立つて居ました。小さな猫が雛僧の足もとで脊伸びをして、須彌壇の後の方へのそ〳〵と歩いて行つたのを面白いと思つて見て居ました。

坊さんたちは幾度か全身を投出すやうに跪いては祈り、祈つては讀經しました。

一本の蠟燭の前に幾人もの坊さんたちが毎夜このやうなお勤をすることを考へると、何となく嚴肅な心持にならずには居られませんでした。

たしかにあの形式の底には何かゞ潜んで居るに違ひない。」

十二三人の湯治客らしい男女が緣に近く跪いて居るのを見たときも、私は同じことを思ひました。

人間は何かをとこしなへに求めて居るのだ。人間は悠久永遠を思ふことなしには生きて居られないのだ。

人間は自分で何物かを求めつゝも、實際は何を求めて居るのか、恐らく永久に知ることは出來ないであらう。けれども求めずには生きて居られないのだ。

經を讀んで居る人も頭を垂れて居る人も、何物かを求めようとする心、何物かに賴らないでは居られないといつたやうな、たゞそれだけの純な、しかし本然的な魂の衝動に動かされて蠟燭の前に坐つて居るのではなからうか。

人類が生れて幾千年來、すべての人類が何を求むるかを知らず、たゞ祈り、たゞ經を讀み、跪いて來たのではなかつたか。

八人九人の御堂の僧侶たちの黑い衣を見て居る間に、私の耳には人類全體の悲しい聲が聞えて來るやうでした。

誰でも神を忘れてはならないのだ。誰も永遠を思ふこと

を忘れてはならないのだ。

私はこんな事を考へながら山門をくゞつて川の岸へ出ました。

高い山と山との間に挾まれた湯の町の燈が消えかゝつて居ました。私はこのやうな山の中にも夜ごと永遠を思ふ人間の祈があり、跪があることを思ふと、非常に人生といふものが寂しくはあるが嚴肅なものであるといふ氣にならずには居られませんでした。

人間が住むところには必ずそこには永遠を欲する、或は悠久にあこがるゝ欣求心が生きて居たことを考へると、どうしても人生に對していゝ加減な心ではすまされなくなる

やうな氣がして來るのでした。

私は夜が更けてから宿に歸つて來ました。

「私が生きて居るあひだは私から祈の心を失つてはならない。」

私は自分の心にかう命じました。

私はこんな殊勝な心になつたのでした。私は近頃になく愉快でした。（草光る）

四 平和の巴里

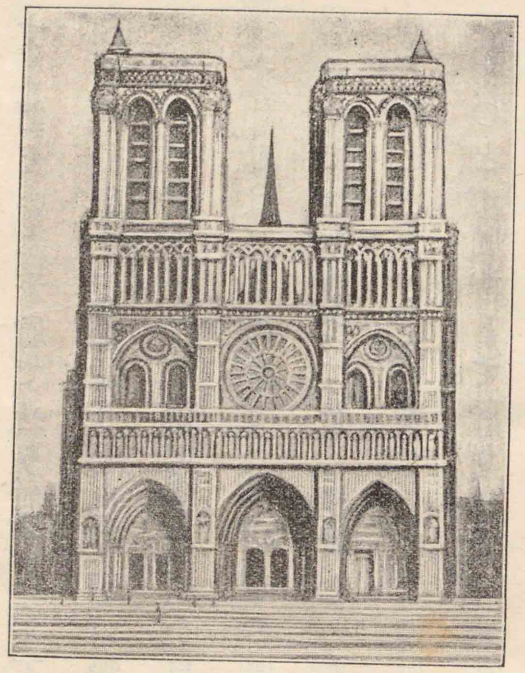
島崎藤村

都市としての廣さから言へば、東京の半ばにも及ぶまいとは、當地へ參らない前から友人の話で聞いては居りました

島崎藤村
名ハ春樹
詩人
小說家
明治三年生

が、その代り立體的に積み重ねた高敞な建物には一家屋にして優に數十の家族を住まはせ、人口に於て三百萬を數ふる此の都が佛蘭西の諺に言ふ一日で現出した巴里で無いことは申上げる迄も御座いません。けれども幾多の設計を承繼ぎ承繼ぎして建設し整理した街路や、建物や、町並木や、公園や、橋梁や、其の他の工事の跡を考へて見ますと、ある一つの意志に依つて成つたかと思はれるほど町全體として一つの大きな建築物のやうな趣を見せて居ります。かういふ點から申せば、巴里は確に一つの傑作だと存じます。いかなる旅人でも、あの凱旋門を中心に四方へ續く街路の一つに立つて見るとか、又は一つ〳〵の異なる意匠から成

立つて居るセイヌ河の橋の一つへでも參りまして、あの西岸に連なり續く町々の光景を望んで見るとか致しますならば、如何に大きな設計と意匠とが全體として統一を保つて居るかを認めない譯にはいかないだらうと存じます。



ノートルダム寺院

この古くさびた都に漂ふ空氣の中にはどういふものが流動し、凝滯すると御考へでせう。あの香の煙で燻り煤けた

やうなノートル、ダムの古塔が聳え立つ町の空に、私はすぐ新式の飛行機が高く飛揚するのを思ひ出すことが出來ます。何といふ矛盾でせう、何といふ不調和でせう。私は無數の自動車などが通り過ぎる廣い滑らかな街路の側で、倒れるまで鞭うたれる荷馬車の馬を目擊したこともございます。私は又、私の捨てた卷煙草の吸殼を、しかも私が見て居る前で拾ひ取つて行く極貧しい人などに幾度となく遭遇したこともございます。こゝには極古いものと極新しいものとが同棲して居ります。非常に開けた事と非常に野蠻な感じのする事とが同棲して居ります。舊敎と科學とが同棲して居ります。詩と散文とが同棲して居ります。

ノートル、ダム　巴里ニアル有名ナ寺　十二世紀ノ建築ガ今尙存シテヰル

かういふあり餘る程の矛盾を容れながら、全體として見れば、いかにも落着いた好い感じを與へる所が多くの旅人の心を惹くのでせうと思ひます。巴里に比べると、伯林はあらゆる意味に於て近代的であります。そして、そつくりそのまゝとは言兼ねますが、伯林といふ語を東京といふ語に置きかへることも出來るやうな氣が致します。

日常のことに就いて申しましても、先づ巴里で氣のつくのは貯へて行く生活の姿といふことでございます。

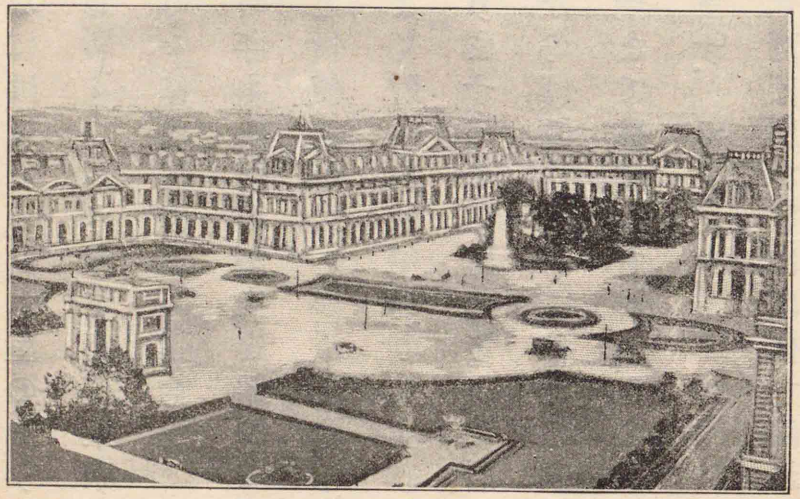
此の宿の老婦などの日常にすら、いかにも物を大切にし、珍重し、愛玩し、またそれを何等かの方法で活用しようとして居ることが眼につきます。こゝの食堂の壁には左程珍し

くもない佛蘭西製の皿がさも大切らしく懸つて居ります。私は宿のおかみさんの眞黑な服を着た胸のあたりに、古い佛蘭西の銀貨を飾につけて居るのを時々見かけます。これは極手近な例を引いたに過ぎません。古い銀貨の胸飾が好い趣味であるかどうかなどと問はずに置いて下さい。其の様な物まで役に立つて居るところを考へて見て下さい。私は當地へ參つて見て、極微細なと思はれるやうな物まで廢らず粗末にされず、しかもそれがごく普通な家に置かれて特色を發揮したり生命を保つたりして行くのを見て、かういふ都にルーヴルのやうな美術館が出來たのは偶然でないことを知りました。日本を始め、支那・印度・波斯・埃

ルーヴル
巴里ニアル佛國ノ舊王宮今有名ナ美術品ノ陳列館ニナツテヰル

及其の他の國から古い貴重な美術品が流れ込んで來て巴里の大商館を飾つて居るのも決して不思議でないことを知りました。

家屋の多くが石造であることも自然と是に適して居ります。家屋の一つ〳〵は皆貯藏庫の趣があります。町全體が藏だと言つても差支ないかも知れません。新奇



ルーヴル美術館

を競ひ目先を變へることの爲には、以前の白木屋のやうな立派な江戸風な家屋さへ、どし〳〵つぶされて行く東京のことに思ひ比べると、こゝの町々には實に古い建物までが大切に保存されて、中には三百年も以前の歷史を語つて居るのがございます。それほど價値と形式とが重んぜられて居ります。すべての物がよく貯へられて居ります。骨董的でなしに鑑賞されて居ります。この町を歩いて居りますと、例へば我が國で申すならば「詩人北村透谷この家に死す」といふやうなことが、年號まで書添へられて、その家を飾つて居るのをよく見掛けます。

何といふ風土の相違でせう。夏は廂なしには住まはれないほどの日光を受け、家屋にも樹木にも乃至衣服や皮膚にまでも附着するほどの風塵を浴び、毎年きまつてやつて來る多量な雨と濕氣と出水と多くの昆蟲とのために苦しめられ、冬は一夜にして町々を灰燼に化し去る程の烈しい北風と戰つて、さういふ中で日常の生活を營んで居ることを思ひますと、住居を成るべくあけひろげ、大事な物は取片附け、黴びた物は乾し、汚れ易い身體は洗ふやうにして、瀟洒と清潔とを愛するやうに成つたのは極自然なことだらうと存じます。宵越の金は使はないなどと申して、貯へることを寧ろ卑しとした江戸子の贅澤もさうした風土が產んだものではございますまいか。わが東京をこの巴里に比べ

北村透谷
新體詩家
明治二十七年歿
年二十七

て見ますと、私はその間の相違のあまりに懸け離れて居るのに驚かずには居られません。こゝには東京で見るやうな日光の強さも輝きも有りません。年百年中、同じ着物で押通して居る人もございます。雨量は少く、空氣は乾燥して物の黴びるといふことも無く、蟲がつくといふことも有りません。從つて蟲干なども當地には有りません。ひどい風も吹かず、塵も立たず、ですから、勞働でもしない限は精精月に一度の入浴でも濟ませる譯でございます。

私はこの町全體を藏のやうだと言ひましたが、もう少し詳しく言つて大きな乾燥室だと形容して見たいと思ひます。かうした乾燥室の中では、戸棚や押入を澤山に造つて物を

しまつて置く必要が無い筈です。ありとあらゆる物が出して置ける筈です。色彩と生命とが長く保たれます。

巴里の都が自然の幸を受けることの多い位置にあることは是迄の話で略〻想像されようかと存じます。それだけを御話すれば、私は今いかにも樂しい月日を送つて居るもののやうに聞えます。しかし私は旅の身でございます。どうして、そんなに住み憂くない場所が旅にあらう筈はございません。

東京のやうな變化の多い處に住慣れた私に取つては、何時の間に夏が過去り何時の間に秋が來たのか、其の差別のつきかねるやうな當地の氣候が何となく物足りなく思はれ

ることがございます。美しいとは思ひますが、時とするとくひ足りないやうな氣も致します。ざあと夕立でも來てくれゝば好いなあと思ひ〳〵して居るうちに秋が來て、蜻蛉一つ町の空に飛んで來るのを見ないうちにはや秋は暮れて行きました。大風が吹いて一晩の中に並木が倒れたなどといふ例も無ければ、蟲のために損はれる憂も少いこの土地にあつては、町々の樹木の完全な發育が見られ、幹から梢までその全景を樂しむことが出來ます。そのかはり綠の色が何となく力弱く灰色がかつて見えます。多少は油蟲などが附着して居ても、もつと精分の强い、もつと繁殖力の熾んな故郷の樹木が見たいと思ふ事がございます。

雨量は少く地震の心配も無いかはりに、青空などもどんよりと致して居りまして、明るいからつとした東京の方の晴れた空が見たいと思ふことがございます。月の光もこゝでは淡うございます。黃ばんだ月が黃昏時になると窓の外にぼんやりと懸つて居るのをよく見かけます。

自分等の性質の中に單調に堪へられないやうな所の有るのは、新陳代謝の激しく行はれる母國の風土から自然と激成されたものかとも思ひます。極靜かに移り變つて行くやうな當地では、月日のたつといふことを東京ほどに感じません。東京の三月は巴里の三年にむかふやうな氣が致します。（平和の巴里）

横井也有
俳人
名古屋藩士
天明三年(一七八三)
歿
年八十二
古今の序
花に鳴く鶯水に住む蛙の聲を聞けば生きとし生けるものいづれか歌をよまざりける

五百蟲譜

横井也有

蝶の花に飛びかひたる、やさしきものゝ限なるべし。それも啼く音の愛なければ、籠に苦しむ身ならぬこそなほめでたけれ。さてこそ莊周が夢もこのものには託しけめ。蛙は古今の序に書かれてより、歌よみの部に思はれたるこそ幸なれ。朧月夜の風しづまりて遠く聞ゆるはよし。古池にとんで翁の目覺したれば、このものゝこと更にも誘りがたし。

蟬はたゞ五月晴に聞きそめたる程がよきなり。やゝ日ざかりに鳴きさかる頃は、人の汗絞るこゝちす。されば初蝶

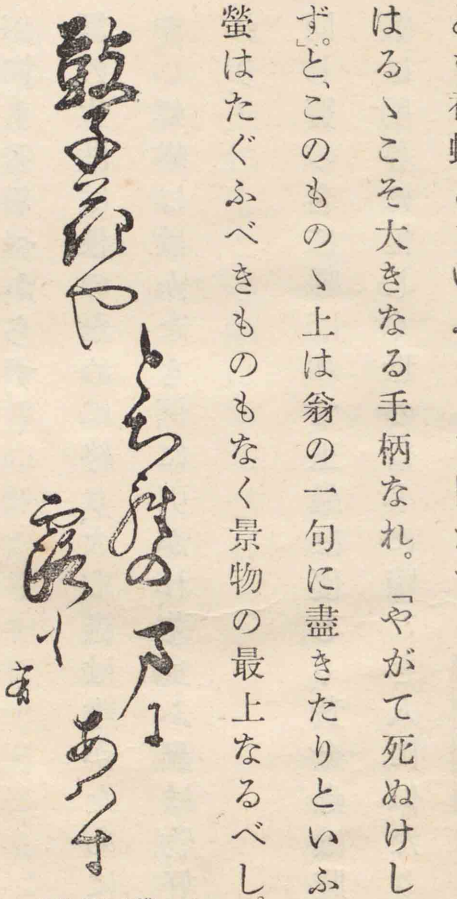
やがて死ぬ
やがて死ぬけしきは見えず蟬の聲

筆蹟
鼓子花やとちらの鐘も間にあはす　也有

貧ノ學者
晋車胤家貧不二常得レ油。夏月則練囊盛二數千螢火一以照レ書。以レ夜繼レ日。

とも初蛙ともいふことを聞かず、このものばかり初蟬といはるゝこそ大きなる手柄なれ。「やがて死ぬけしきは見えず」と、このものゝ上は翁の一句に盡きたりといふべし。

螢はたぐふべきものもなく景物の最上なるべし。水にとびかひ草にすだく。



横井也有筆蹟

五月の闇は只このものゝ爲にやとまでぞ覺ゆる。然るに貧の學者に捕られて油火のかはりにせられたるは、このものゝ本意にはあらざるべし。歌に螢火と詠ませざるは殊の外の不自由なり。俳諧にはその眞似すべからず。

槐安の都
淳于棼、醉夢ニ大槐安國ニ見レ王王曰吾南柯郡ニ領ス守ノ職ニ十載ニシテ使者送出レ穴ニ遂寤。尋ニ古槐下蟻穴一乃槐安國。又一穴直上ニ南枝ニ即南柯郡也。

茅蜩は多きもやかましからず。暑さは晝の梢に過ぎて、夕べは草に露おく頃ならん。つくつくぼふしといふ蟬は、つくしこひしともいふなり。「筑紫の人の旅に死して、このものになりたり」と世の諺にいへりけり。哀は蜀魂の雲に叫ぶにも劣るべからず。

蠶の生涯は世のために終り、火取蟲は誰がために身を焦すや。蜉蝣ははかなき例に引かれ、蓼食ふ蟲は物好の謗となれり。

同じ寶の名に呼ばれて、玉蟲は優しく、黄金蟲は賤し。蟻は明暮に忙しく世の營みに隙なき人に似たり。東西に聚散し、餌を求めて止まず。いつか槐安の都を逃れてその

蟷螂の斧
欲下以ニ蟷螂之斧一禦中隆車之隧。

原
東海道ノ宿
駿河國駿東郡原町

吉原
東海道ノ宿
駿河國富士郡吉原町

身の安きことを得ん。さるも便あしき方に穴をあけて千丈の堤を崩すべからず。

蟷螂の痩せたるも、斧をもちたる誇よりその心いかつなり。人の上にもこの類はあるべし。

蟹の歩みに譬ふべきものこそなけれ。たゞ原・吉原を駕籠にのりて富士を眺めゆく人には似たり。

促織・鈴蟲・轡蟲はその音の似たるをもて名によべり。松蟲のその木にもよらで、いかでかく名を附きたるならん。毛生ひ、むくつけき蟲にも同じ名ありて、松を枯し、人に疎まる。一在所に二人の八兵衛ありて、一人は後生を願ひ、一人は殺生を事とす。これ松蟲の類なるべし。

蚊は憎むべき限ながら、さすが卯月の頃端居珍しき夕べ、始めてほのかに聞きたらん、又は長月のころ力なく殘りたるは、淋しき方もあり。蚊帳つりたる家のさま、蚊遣焚く里の煙など、且は風雅の道具ともなれり。藪蚊はことに烈しきを、かの竹林の七賢の夜話には、いかに團扇のひまなかりけん。（鶉衣）

竹林の七賢
嵇康
阮籍
山濤
向秀
劉伶
阮咸
王戎

六　小松内府

太政入道はかやうに人々數多いましめ置いても、尚心ゆかずや思はれけん、既に赤地の錦の直垂に黑絲縅の腹卷の白金物打つたる胸板せめ、先年安藝守たりし時、神拜のついでに靈夢を蒙つて嚴島大明神より現に賜はられたりける銀の蛭卷したる小長刀、常の枕を放たず立てられたりしを脇にはさみ、中門の廊にぞ出でられたる。大方その氣色ゆゝしくぞ見えし。「貞能」と召す。

筑後守貞能は木蘭地の直垂に緋縅の鎧着て、御前に畏つてぞ候ひける。入道宣ひけるは、「いかに貞能、この事いかゞおもふぞ。保元に平右馬助を始めとして一門半ば過ぎて、新院の御方に參りにき。一宮の御事は故刑部卿殿の養君にてまし〳〵しかば旁見放ち參らせ難かりしかども、故院の御遺誡に任せて、御方にて先をかけたりき。これ一つの奉公。次に平治元年十二月、信頼・義朝が謀叛の時、院内を取り

平右馬助
新院
崇德上皇
一宮
重仁親王
故刑部卿
平忠盛
故院
鳥羽法皇
院
後白河上皇
内
二條天皇

奉つて大内に立籠り、天下くらやみとなりたりしにも、入道隨分身を捨てゝ兇徒を追落し、經宗・惟方を召しいましめしに至るまで、君の御爲に既に命を失はんとする事度々に及ぶ。されば人何と申すとも、いかでかこの一門をば七代までは思召してさせ給ふべき。それに成親といふ無用のいたづらもの、西光と申す下賤の不當人が申すことに君のつかせ給ひて、動もすればこの一門滅さるべき由の御結構こそ然るべからね。この後も讒奏する者あらば、當家

平重盛（山城國高雄神護寺藏）

追討の院宣を下されつと覺ゆるぞ。朝敵となつて後は、いかに悔ゆとも益あるまじ。暫く世を鎭めん程、法皇をば鳥羽の北殿へ移し參らするか、さらずばこれへまれ御幸をなし參らせんと思ふはいかに。その儀ならば、定めて北面の者どもが中より矢をも一つ射んずらん。その用意せよと侍どもに觸るべし。大方は入道、院方の奉公思ひ切つたり。馬に鞍おかせよ、きせながを取出せ」とこそ宣ひけれ。

主馬判官盛國急ぎ小松殿へ馳參つて「世ははやかう候」と申しければ、大臣聞きもあへ給はず、「嗚呼、はや成親卿の首の刎ねられたんな」と宣へば、「その儀では候はねども、入道殿の御きせながを召され候上は、侍どもゝ皆打立つて只今院の御

所法住寺殿へ寄せんとこそ出立ち候ひつれ。暫く世を鎭めん程、法皇をば鳥羽の北殿へ遷し參らするか、然らずばこれへまれ御幸をなし參らせうとは候へども、内々は鎭西の方へ流し參らせんとこそ議せられ候ひつれ。」と申しければ、大臣「何によりて只今さる御事のおはすべき。」とは思はれけれども、「今朝の禪門の氣色さる物狂ほしき事もやおはすらん。」とて、急ぎ車を飛ばせて西八條殿へぞおはしたる。

門前にて車より下り、門の中へさし入りて見給ふに、入道腹卷を着給ふ上、一門の卿相・雲客數十人各、色々の直垂に思ひ思ひの鎧着て、中門の廊に二行に着せられたり。その外、諸國の受領・衞府・諸司などは緣に居こぼれ、庭にもひしと並み

五戒
殺生戒
偸盜戒
邪淫戒
妄語戒
飲酒戒

居たり。旗竿ども引きそばめ〳〵馬の腹帶をかため、胄の緒をしめ、只今皆打立たんずる氣色どもなるに、小松殿、烏帽子・直衣に大紋の指貫のそばを取つて、さやめき入り給へば、事の外にぞ見えられける。

入道ふしめになつて、「あはれ例の内府が世をへうずる樣に振舞ふものかな、大きにいさめばや。」と思はれけれども、流石子ながらも内には五戒を保つて慈悲を先とし、外には五常を亂らず禮儀を正しうし給ふ人なれば、あの姿に腹卷を着てむかはんこと、流石おもはゆうはづかしうや思はれけん、障子を少し引立てゝ、腹卷の上に素絹の衣をあわてぎに着給ひたりけるが、胸板の金物の少し外れて見えけるを隱さ

うと、頻に衣の胸を引違へ〳〵ぞし給ひける。大臣は舍弟宗盛卿の座上につき給ふ。入道宣ひ出さるゝ事もなく、大臣もまた申し上げらるゝ旨もなし。

やゝあつて入道宣ひけるは、「成親卿が謀叛は事の數にも候はず、一向法皇の御結構にて候ひけるぞや。暫く世を鎭めん程、法皇をば鳥羽の北殿へ遷し參らするか、然らずばこれへまれ御幸をなし參らせんと思ふはいかに。」と宣へば、大臣聞きもあへ給はず、はら〳〵とぞ泣かれける。入道「さて、いかにやいかに。」と呆れ給へば、やゝあつて大臣涙を抑へて、「この仰承り候に、御運ははや末になりぬと覺え候。人の運命の傾かんとては、必ず惡事を思ひ立ち候なり。又御有樣を

見參らせ候に、更に現とも覺え候はず。流石我が朝は邊地粟散の境とは申しながら、天照大神の御子孫、國の主として、天兒屋根命の御末、朝の政を掌らせ給ひしよりこのかた、太政大臣の官に至る人の甲冑をよろふこと禮儀をそむくにあらずや。就中出家の御身なるに、法衣を脫ぎ捨てゝ忽ちに甲冑をよろひ、弓箭を帶しましまさんこと、內には破戒無慙の罪を招くのみならず、外には仁義禮智信の法にもそむき候ひなんず。かたゞ〳〵恐れある申事にて候へども、心の底に旨趣を殘すべきにも候はず。

まづ世に四恩候。天地の恩、國王の恩、父母の恩、衆生の恩是なり。その中に最も重きは朝恩なり。普天の下王土に非

蓮府
南齊ノ宰相王儉ガ相府ニ蓮ヲ栽エタ事カラ出タ名

槐門
面三三槐二三公位

ずといふことなく、率土の濱王臣に非ずといふことなし。さればかの潁川に耳を洗ひ、首陽山に蕨を折りし賢人も勅命の背き難き禮儀をば存知すとこそ承れ。いかにいはんや、先祖にも未だ聞かざつし太政大臣を極めさせ給ふ。所謂重盛が無才愚暗の身を以て蓮府・槐門の位に至る。加之、國郡半ばは一門の所領となつて、田園盡く一家の進止たり。是希代の朝恩に非ずや。今此等の莫大の御恩を思召し忘れさせ給ひて、みだりがはしく法皇を傾け參らせ給はん事、天照大神・正八幡宮の神慮にも背かせ給ひ候ひなんず。それ日本は神國なり。神は非禮を受け給ふべからず。この一門が代々の朝敵を平げて四海の逆浪を鎭めしことは無雙の忠なれども、その賞に誇ることは傍若無人とも申しつべし。然れども當家の運命未だ盡きざるによりて、事既に露れ候ひぬ。その上、仰せ合はせらるゝ成親卿を召置かれぬる上は、たとひ君如何なる不思議を思召し立たせ給ふとも、何の恐か候ふべき。所當の罪科行はれぬる上は、退いて事の由を陳じ申させ給ひて、君の御爲には愈〻奉公の忠勤を盡し、民の爲には益〻撫育の哀憐を致させ給はゞ、神明の加護に預つて佛陀の冥慮に背くべからず。神明・佛陀感應あらば、君も思召し直すこと、などか候はざるべき。

是は尤も君の御理にて候へば、叶はざらんまでも、院中を守護し參らせ候べし。その故は、重盛はじめ敍爵より今大臣

大將に至るまで、しかしながら君の御恩ならずといふことなし。この恩の重きことを思へば、千顆萬顆の玉にも超え、その恩の深き色を按ずるに、一入再入の紅にもなほ過ぎたらん。然らば院中に參り籠り候べし。その儀にて候はゞ、重盛が身に代り命に代らんと契りたる侍ども少々候らん。是等を召具して院の御所法住寺殿を守護し參らせ候はゞ、流石以ての外の御大事でこそ候はんずらめ。悲しきかな、君の御爲に奉公の忠を致さんとすれば、迷盧八萬の頂より も猶高き父の恩忽ちに忘れんとす。痛ましきかな、不孝の罪を逃れんとすれば、君の御爲には已に不忠の逆臣となりぬべし。進退維谷れり、是非いかにも辨へ難し。申し受く

千顆萬顆の玉
瑩レ日瑩レ風高低
千顆萬顆之玉。
染レ枝染レ浪表裏
一入再入之紅。

迷盧八萬
蘇迷盧山ノ高サ
八萬四千由旬

る所詮は、唯重盛が首を召され候へ。その故は、院參の御供をも仕るべからず、又院中をも守護し參らすべからず。（中略）富貴といひ榮華といひ、朝恩と申し、重職といひ、旁〻極めさせ給ひぬれば、御運の盡きんこと難かるべきにあらず。富貴の家には、祿位重疊せり、再び實なる木はその根必ず傷むと見えて候。心細うこそ候へ。いつまでか命生きて、亂れん世をも見候べき。唯末代に生を受けてかゝる憂き目にあひ候ふ重盛が果報の程こそつたなう候へ。只今も侍一人に仰付けられ、御坪の内へ引出されて、重盛が頭を刎ねられんことは、いと易い御事でこそ候はんずらめ。是を各聞き給へ」とて、直衣の袖も絞るばかりにかきくどき、さめ〴〵と

泣き給へば、その座に並み居給へる平家一門の人々、皆袖をぞ濡されける。（平家物語）

七　寂光院

かゝりし程に、法皇は文治二年の春の比、建禮門院の大原の閑居の御住居御覽ぜまほしう思召されけれども、二月彌生のほどは嵐烈しう、餘寒も未だ盡きず、峰の白雪消えやらで、谷のつらゝも打解けず。かくて春過ぎ夏來て北祭も過ぎしかば、法皇夜をこめて大原の奥へ御幸なる。しのびの御幸なりけれども、供奉の人々には公卿六人、殿上人八人、北面少々候ひけり。

法皇　後白河法皇
建禮門院　平德子
平清盛ノ女
高倉天皇ノ中宮
安德天皇ノ御母
大原　山城國愛宕郡ノ山村
京都ノ北四里
北祭　賀茂ノ祭
四月中ノ酉ノ日

瓢簞屢〻空し　橘直幹ノ申文ニ瓢簞屢空、草滋ニ顏淵之巷。藜藿深鎖、雨濕ニ原憲之樞。

さて女院の御庵室を叡覽あるに、軒には蔦・朝顏這ひかゝり、しのぶ交りの忘草、「瓢簞屢〻空し、草顏淵が巷に滋く、藜藿深く鎖せり、雨原憲が樞を濕す」ともいひつべし。板の葺目もまばらにて、時雨も霜もおく露も、洩る月影に爭ひてたまるべしとも見えざりけり。後は山、前は野べ、いさゝを笹に風さわぎ、世に立たぬ身の習として、憂き節しげき竹柱、都の方の言傳は間遠に結へるませ垣や、わづかに言とふものとては、峰に木傳ふ猿の聲、賤が爪木の斧の音、これらが音づれならでは、まさきのかづら青つゞらくる人稀なる處なり。

法皇「人やある、人やある」と召されけれども御いらへ申す者もなし。やゝありて老い衰へたる尼一人參りたり。「女院

はいづくへ御幸なりぬるぞ」と仰せければ、「この上の山へ花摘に入らせたまひて候」と申す。「さこそ世を厭ふ御習といひながら、さやうの事に仕へ奉るべき人もなきにや。御痛はしうこそ」と仰せければ、この尼申しけるは、「五戒・十善の御果報盡きさせたまふによりて、今かゝる御目を御覽ぜられ候にこそ。捨身の行に、なじかは御身ををしませたまひ候べき」とぞ申しける。この尼の有様を御覽ずれば、身には絹・布のわきも見えぬものを結び集めてぞ着たりける。「あの有様にてもかやうのことを申す不思議さよ」とおぼしめして、「抑〻汝は如何なる者ぞ」と仰せければ、この尼さめ〴〵と泣いてしばしは御返事にも及ばず。やゝありて涙をおさへ

紀伊二位
信西ノ妻朝子
紀伊守範元ノ女

て、「申すにつけて憚り覺え候へども、故少納言入道信西が女阿波内侍と申すものにて候なり。母は紀伊二位。さしも御いとほしみ深うこそ候ひしに、御覽じ忘れさせたまふにつけても、身の衰へぬるほど思ひ知られて、今更せん方なうこそ候へ」とて、袖を顏に押しあてゝ忍びあへぬさま、目も當てられず。法皇「げにも汝は阿波内侍にてあるござんなれ。御覽じ忘れさせたまふぞかし。何事につけても只夢とのみこそ思召せ」とて御涙せきあへさせたまはねば、供奉の公卿・殿上人も、「不思議の事申す尼かな」と思ひたれば、「理にて申しけり」とぞ各〻感じあはれける。

さて女院の御庵室へ入らせおはしまし、障子をひきあけて

善導
唐ノ高僧
八軸の妙文
法華經
九帖の御書
善導和尚ノ觀無量壽經ノ疏

叡覽あるに、一間には來迎の三尊おはします。中尊の御手には五色の絲を懸けられたり。左に普賢の繪像、右に善導和尚並に先帝の御影をかけ、八軸の妙文、九帖の御書も置かれたり。蘭麝の匂にひきかへて、香の煙ぞ立ちのぼる。さて傍を叡覽あるに、御寢所と思しくて、竹の御竿に、麻の御衣、紙の衾なんど懸けられたり。さしも本朝・漢土の妙なる類數を盡し、綾羅錦繡の粧も、さながら夢にぞなりにける。法皇

建禮門院御像（寂光院藏）

大納言典侍局
平重衡ノ室

御涙を流させ給へば、供奉の公卿・殿上人も、まのあたり見奉りし事ども今のやうに覺えて、皆袖をぞ絞られける。

やゝあつて、上の山より濃き墨染の衣着たりける尼二人、岩のかけぢを傳ひつゝおり煩ひたる樣なりけり。法皇「あれはいかなる者ぞ」と仰せければ、老尼涙を抑へて、「花筐臂にかけ、岩躑躅取具して持たせたまひて候は女院にて渡らせたまひ候。爪木に蕨折添へて持ちたるは鳥飼中納言維實が女、五條大納言國綱の養子、先帝の御乳母、大納言典侍局」と申しもあへず泣きけり。法皇御涙を流させたまへば、供奉の公卿・殿上人も皆袖をぞ濡されける。女院は「世を厭ふ御習ひながら、今かゝる有樣を見えまゐらせんずらんはづ

かしさよ。消えも失せばや。」と思召せどもかひぞなき。宵宵ごとの閼伽の水、むすぶ袂もしをるゝに、曉起きの袖の上、山路の露もしげくして、しぼりやかねさせたまひけん、山へも歸らせたまはず、又御庵室へも入らせおはしまさず、あきれて立たせまし〳〵たる處に、內侍の尼參りつゝ花筐をば賜はりけり。

「世を厭ふ御習、何か苦しう候べき。早々御見參ありて、還御なし參らせ候へ。」と申されければ、女院御涙を抑へて御庵室に入らせおはします。「一念の窓の前には攝取の光明を期し、十念の柴の樞には聖衆の來迎をこそ待ちつるに、思の外の御幸かな。」とて御見參ありけり。

女院涙を抑へて申させたまひけるは、「今かゝる身になり候ことは一旦の歎申すに及び候はねども、後生菩提のためには悅と覺え候なり。いつの世にも忘れ難きは先帝の御面影。忘れんとすれども忘られず、忍ばんとすれども忍ばれず。たゞ恩愛の道ほど悲しかりけることはなし。されば、かの御菩提のために、朝夕の勤怠ること候はず。これも然るべき善知識とおぼえ候。」と申させたまへば、法皇仰なりけるは、「人間のあだなる習、今更驚くべきには候はねども、御有樣見參らせ候にせんかたなうこそ候へ。」とて御涙せきあへさせたまはず。（平家物語）

八　平家雜感

高山樗牛

高山樗牛
名ハ林次郎
評論家
文學博士
明治三十五年歿
年三十二

みよし野の
三吉野の山のあなたに宿もがな
世のうき時のかくれにせん

都落

凡そ人國の傳へ遺しゝ史は多かれど、平家の都落ばかりあはれにもまた目ざましきはあらじ。

平城の餘燼未ださめず、墨股の勝鬨なほ響きぬるに、信越俄に雲亂れて木曾の五萬騎はや比叡の前後に充ち滿ちぬ。宇治・淀の備脆くも潰えて、都も今を限とぞ見えし。あはれ一門の天下、身を置くに處なく、この世のうきにみよし野の山のあなたに隱れがもなきか。いざさらば已みなん。都の中にていかにもならんよりは、西國の御幸に一旦の凌辱を忍ばせ給はんや。生死もわかぬ別路に人のあはれの限もなし。また歸り來べき都としもおもはねばにや、六波羅・池殿・西八條以下、一門譜第の邸宅宿房、京・白川の四五萬家をあはせて、一炬の煙となし果てぬるこそあわたゞしかりしか。

故郷を
故郷を燒野が原とかへりみて末も煙の波路をぞ行く

こゝに鳳闕の礎むなしく殘り、椒房の嵐夜々かなしむ。保元このかた天下の榮華を盡したる花の都の故郷を燒野の原とかへりみて、末も煙の波路をば行くへも知らずさすらふらん。直衣束帶の身にも今は黑金の衣をのべたれども、誰かは詠歎の餘哀になれて弓矢の響を勵むべき。さても捨てがたき命や。今こそは世にも人にも憂かりけれ、流石は忍ばるゝ昔の樣の夢に入るをば如何にせん。翠華搖々

として西に向へば、秋風到るところ野に滿てり。あゝ昨日は東關のもとに轡を並べて十萬餘騎、今日は西海の波に纜を解きて七千餘人。行く手の空はわかねども、身にしむ秋は欺かれず、渚によする波の音、袂に宿る月の影、いづれか心を傷ましめざるべき。月の出づるさの山の端をあなたの空とおぼしけん、日暮舷に笛ふく人あり、響は遠く煙波をかすめて、三軍ひとしく耳をそばだつ。嗚呼この時、この人、思果して如何。

沒落

平家はさすがに名門のことゝて、沒落のきはまで大義名分を執りて動かざりしは、ゆゝしくもまた哀れの極みなりき。

十善
不殺生
不偸盜
不邪淫
不妄語
不惡口
不兩舌
不綺語
不貪欲
不嗔恚
不邪見

木曾は兵衞佐に疎まれて、東國の討手はや途にあり。強ひて院宣請ひ受けゝれども孤軍もとより勝算無し。乃ち使を西國に立て、合體して兵衞佐討つべきよしを言送りぬ。平家の答はかくなりき。「よしや世は季になりぬとも、木曾なんどに語らはれて如何でか都に上るべき。畏くも十善の帝王、三種の神器を帶してこなたに渡らせ給ふ。須く冑を脱ぎ、弦をはづし來りて軍門に降るべし、さらば東國征討の御供にも加へらるべきか」と。あゝ何ぞ其の言辭の堂々として沒落のやからに類はざるや。平家にして若し一時の權變を弄びて勢を廻らさんとだに思はゞ、かゝる時こそ乘ずべき機會なれ。さるを名分の正しきを執りて成敗の

數を顧みず。若し偏に利害の眼よりすれば迂は則ち迂ならんも、かくして滅びんは、垢を含みて存へんよりも如何ばかり美はしかるべき。

高山樗牛

その太宰府に落行くや、緒方三郎使して申しけるは、「まことに重代の芳恩を思はざるにあらざれども、一院の仰默し難ければ、九國におき奉るべき地も候はず」と。平大納言乃ち烏帽子直垂して出向ひて宣ひけるは、「それ我が君は天孫四十九世の正統、神武天皇より人皇八十一代に當らせ給ふ。祖宗歷代の神靈我が君

平大納言
平時忠
清盛ノ妻ノ兄

をこそ守らせ給ふらめ。就中當家は保元・平治以來度々の逆亂を鎭めて九州の者共をば皆内さまへこそ召されしか。然るを何ぞや、かゝる重恩をも打忘れて、あづま夷の下知に從ふこそ奇怪至極なれ」と。嗚呼何ぞその態度の堂々たるや。

本三位の中將
平重衡

本三位の中將一の谷に捕はれけるを、院宣屋島に下りて「三種の神器都に上せよ、重衡を放ち還さん」とぞ傳へける。平家の請文こそまことに壯大ならびなかりしか。曰く「院宣謹みて承り畢んぬ。通盛卿以下、一の谷にて誅せられけるもの其の數少からず、何ぞ重衡一人の宥恕を喜ばんや。三種の神器は正統の天子一日も御身を離し給ふべきに非ず。

そも〳〵我が君は故高倉の院の讓を受けさせ給ひてよりこゝに四年、東夷・北狄の禍にあひて暫く西國に御幸あるのみ。天に二日無く、國に二君なし。還幸なからんに於ては神器などか都に還るべき。そも〳〵賴朝は逆賊の裔、幸に入道相國の慈悲によりて申し宥められし所なり。然るに忽ちにしてこの鴻恩を忘れて妄に干戈を弄ぶ、やがて神罰其の身にかへるべきか。君にも當家累代の奉公、亡父數度の忠節を思召し忘れずば、逆賊の裔に與し給はずして早く西國の御幸あるべきか。一門の武運こゝに盡きなば、鬼界・高麗・天竺・震旦のはてまでもまかりなん。悲しい哉、人皇八十一代が間傳承あやまりなかりし靈器、今にして空しく異國の寶とならんとは。宗盛頓首謹みて申す」と。

かくて平家は亡びぬ。亡ぶるまでも成敗の爲に其の名節を枉ぐることをなさゞりき。あはれ平家の世ざかりはまことに大いなりしが、其の沒落の更に大いなるには及ばざりき。うるはしきかな平家、かくして亡びたりとて何の恨むるところぞ。（樗牛全集）

九　上古の文學

第一　祝　詞

上古の祭祀は即ち政治なり。故に政を訓じて「まつりごと」といふ。敬神崇祖の民族が皇室を中心として祭祀の庭に

集り、祖先の勳業をしぬび、よりて以て團結せるは即ち我が建國の體裁なり。この時未だ文字なし。必ず口々に傳誦せられたる詩的美辭ありてこの祭祀に伴ひしならん。壽詞といひ、祝詞といふもの即ち是なり。

祝詞は、天皇即ち現神の命令によりて神祇に白す詞にして、常に國家の安穩國民の幸福を求むるを以て主眼とす。國民が現世の福祉を求め、清淨を愛する風は、皆祝詞の中に之を認むべく、支那・印度の文明の感化未だあらはれざる上代の國民思想は明かに我が祝祠式の祝詞にあらはれたりといふべし。

文辭上より祝詞を見んか、その語彙の數は甚だ多からず。

「常磐に堅磐に」、「祓へ給へ、清め給へ」の如く對語を連用すること多し。こは單語のみならず、句に於ても亦然り。「朝には御門を開き、夕べには御門を閉て」、「みかのへたかしり、みかのはらみてならべ」の類是なり。かく同一音・同一語を反復するは、一方に於て單調に陷るを防ぐと同時に、又自ら莊重正大の風を添ふる所以なりといふべし。

原文
辭別伊勢國坐天照太御神前白久……

祈年祭の祝詞

辭別きて伊勢に坐す天照太御神の太前に白さく、皇神の見はるかします四方の國は、天のかき立つ極み、國のそき立つ限、青雲の靄く極み、白雲の墜り居向伏す限、青海原は棹柁干さず舟の艫の至り留る極み、大海原に舟滿ち續けて、陸より往く道は

荷の緒結ひ堅めて、岩根樹根踏みさくみて、馬の爪の至り留る限、長道間無く立ちつゞけて、狹き國は廣く、峻しき國は平けく、遠き國は八十綱打掛けて引寄する事の如く、皇太御神の寄さし奉れば、荷前は皇太御神の太前に横山の如く打積み置きて、殘をば平けく聞しめさむ。又皇御孫命の御世を手長の御世と、堅磐に常磐に齋ひ奉り、茂し御世に幸へ奉るが故に、皇吾睦神漏伎神漏彌命と鵜じ物頸根つきぬきて、皇御孫命の宇豆の幣帛を稱辭竟へ奉らくと宣る。（延喜式）

第二　歌謠

上代の歌謠はその形式未だ一定せず。一句の語數も定りなく、長歌・短歌の別もなし。唯長短句を錯綜せしめ、疊句・對句を列ねて聲調をよくするのみ。その內容は極めて單簡にして、物に觸れ事に感じて纔に直覺的情緒を述べたる者に過ぎず。然れども、自然と人事とを結合することは早く已にこゝにあらはる。敵軍の來襲するを雁の田に下るといひ、戰亂の治るを雨のやむに喩ふる類、皆人事を以て自然に喩へたるものなり。かくて上代の歌謠は個人的抒情詩として、祝詞は民族的祭神の詞、寧ろ敍事詩として、最古國民の詩的產物たり。支那文化の影響の未だ及ばざりし太古國民の文學として、興味の最も深きを覺ゆ。

神武天皇長髓彥を擊ち給はんとせし時詠み給へる

みづ〳〵し久米の子等が、垣もとに植ゑし薑口ひゞく、我は

忘れじ、擊ちてしやまむ。

日本武尊の御妃弟橘媛、海に入り給ひし時詠み給へる

さねさし相模の小野にもゆる火の
火中に立ちてとひし君はも。（古事記）

柿本人麿
持統文武二帝ノ頃ノ歌人

萬葉集は短歌四千百餘首、長歌二百六十餘首、旋頭歌六十餘首の大歌集なり。萬葉時代、委しくいへば藤原朝即ち持統文武の朝以後、始めて和歌の形式の非常に擴大し、長歌の發達せしは顯著なる事實とす。中にも柿本人麿の作歌には長篇頗る多く、その歌雄渾壯大なり。上代の文學としての祝詞は古來の舊辭を敍し、傳說を述べて數百言を陳ねたるに、咄嗟の間に成るを主とせる歌謠は概ね五十言に滿たず。

山部赤人
聖武帝ノ頃ノ歌人

山上憶良
聖武帝ノ頃ノ歌人
天平五年（一三三）卒
年四十七

今や人麿は民衆共同の祝詞の形式を以て之を箇人の抒情詩に應用せしなり。然れども人麿が功績は單にその形式を擴大せしのみにはあらず、實は祝詞中に含有せる敬神崇祖の精神を抒情詩として歌ひ出せるに存す。山部赤人は人麿に比すれば概して詩形の簡單を喜び、歌中の句法も亦短き文に分割し得べく、人麿の如く一瀉千里の勢なし。その長は瀟洒にあり、簡潔にあり。富士山の歌の如き、雲・雪・山・河等の語を用ひたるのみにて、高潔崇高の風韻を帶ぶると富士山そのものに彷彿たり。これ亦祝詞の神を傳へたるもの。山上憶良に至りては、支那に遊べることあり、漢學に通じ、佛說を喜ぶ。詠ずる所皆支那思想印度思想に基づ

き、歌の序としては、漢文の四・六文を用ひ、儒・佛の影響最も顯著なり。

近江の荒都を過ぎし時によめる　柿本人麿

玉だすき畝火の山の
あれましゝ神のことゞ
天の下しろしめしゝを、
あをによし奈良山を越え
天ざかる鄙にはあれど、
樂浪の大津の宮に
天皇の神の尊の
大殿はこゝと言へども、
霞立つ春日のきれる、
見れば悲しも。

反歌

樂浪の志賀の唐崎さきくあれど、
大宮人の船待ちかねつ。
樂浪の志賀の大わだ淀むとも、
昔の人にまたも逢はめやも。

富士山を望みて　山部赤人

天地の分れしときゆ、
神さびて高く貴き
駿河なる富士の高嶺を
天の原振りさけ見れば、
春草の茂く生ひたる、
百磯城の大宮處
見れば悲しも。

大津宮　天智・弘文兩帝ノ都

渡る日のかげも隱ろひ　照る月の光も見えず、
白雲もい行きはゞかり　時じくぞ雪はふりける。
語り繼ぎ言ひ繼ぎ行かん、富士の高嶺は。

反歌

田兒の浦ゆ打出でて見れば、眞白にぞ
富士のたかねに雪はふりける。

山上憶良

思子等歌

釋迦如來金口正說。等思衆生如羅喉羅。又說愛無過子。
至極大聖尙有愛子之心。況乎世間蒼生誰不愛子乎。
宇利波米婆、胡藤母意母保由。
久利波米婆、麻斯提斯農波由。

等思衆生　吾觀衆生無二偏黨一如羅怙羅。愛無過子。誰不愛子乎。

伊豆久欲利、枳多利斯物能曾。
麻奈迦比爾、母等奈可可利提、
夜周伊斯奈佐農。

反歌

銀母　金母玉母　奈爾世武爾
麻佐禮留多可良　古爾斯迦米夜母。（萬葉集）

第三　歷史

大化の改新、支那文化の輸入は自ら國運の進展を促し、茲に修史の事業は起り、地誌の編纂は企てられたり。その古事記・日本書紀は傳へて今日に至りたれども、風土記は多く亡佚せり。古事記は神代より推古天皇までの歷史にして、稗

田阿禮が舊辭を誦せるを、太安麿等が筆記せるものなりといふ。從つてその文は大體古くより口々に言傳へたるまゝに寫せるものなるべく、日本第一の古典なり。就中神代の卷は神話・傳說・歌謠等に富み、最も趣味多し。日本書紀は漢文の國史にして、國文學としての價値は少し。

稻羽の素菟

原文

八十神各有レ欲レ婚二稻羽之八上比賣一之心上共行二稻羽一時於二大穴牟遲神一負レ帒爲二從者一率往：

八十神おのも〳〵稻羽の八上比賣を婚はんの心ありて、共に稻羽に行ける時に、大穴牟遲神に帒をおほせ從者として率て往きゝ。こゝに氣多之前に到りける時に、裸なる菟伏せり。八十神その菟に云ひけらく、「汝せむはこの海鹽を浴み、風の吹くに當りて、高山の尾上に伏してよ。」といふ。故其の菟、八十神の教ふるまゝにして伏しき。こゝにその鹽の乾くまに〳〵其の身の皮悉に風に吹裂かえしからに、痛みて泣伏せれば、最後に來ませる大穴牟遲神其の菟を見て、「何ぞも汝泣伏せる。」と問ひ給ふに、菟まをさく、「僕淤岐の島にありて、此の國に渡らまく欲りつれども、渡らむよし無かりし故に、海の和邇を欺きて言ひけらく、『吾と汝と族の多き少きを比べてむ。故汝は其の族のありのこと〳〵率て來て、此の島より氣多之前まで、皆列み伏しわたれ。吾その上を踏みて走りつゝよみ渡らむ。こゝにあが族と、何れ多きといふことを知らむ。』かくいひしかば、欺かえて、列み伏せりし時に、吾其の上を踏みてよみ渡り來て、今地に下りむとする時に、吾

『汝は我に欺かえつ。』と言ひ竟れば、即ち最端に伏せる和邇、我を捕へて、悉に我が衣服を剝ぎき。此に因りて泣き患ひしかば、先だちていでましゝ八十神のみことともちて、『海鹽を浴みて、風に當り伏せれ。』と教へたまひき。かれ教のごとせしかば、我が身悉にそこなはえつ。」とまをす。

こゝに大穴牟遲神その兎に教へたまはく、「今とくこの水門に往きて、水もて汝が身を洗ひて、即ち其の水門の蒲の花をとりて、敷きちらして其の上に輾い轉びてば、汝が身もとの膚の如、必ず癒えなむものぞ。」と教へ給ひき。故教の如せしかば、其の身本の如くになりき。これ稻羽の素兎といふものなり。今にうさぎがみとなもいふ。故その兎大穴牟遲神に白さく、「此の八十神は必ず八上比賣を得たまはじ。佀を負ひたまへれども、汝が命ぞ獲たまひなむ。」とまをしき。（古事記）

太古より奈良朝に至るまでは、その間の年代頗る長く、一般文化の發達、之を祖先建國の昔に比ぶれば、亦實に霄壤の差ありしなるべし。然れども未だ國字を有するに至らざりき。今總じて之を上古と稱す。（「國文學歷代選」に據る）

一〇　二本松

落合直文

門　松

ひとつもて君を祝はん、ひとつもて親をいはゝん、二本ある松。

落合直文
國文學者
明治三十六年卒
年四十三

伊藤左千夫
歌人
大正二年歿
年五十

佐々木信綱
歌學者
明治五年生

與謝野寛
歌人
明治六年生

尾上柴舟
名ハ八郎
國文學者
明治九年生

兒　伊藤左千夫

しばらくを三間うちぬきて夜ごと〳〵兒らがあそぶに家わきかへる。

大和路　佐々木信綱

ゆく秋の大和の國の藥師寺の塔の上なるひとひらの雲。

伊藤博文公を悼みて　與謝野寛

いくさぶね君が柩を載せかへる東京灣の秋の日のいろ。

投網　尾上柴舟

清き水ひかれる中をわたり來て月に投げたるわがとあみかな。

窪田空穗
名ハ通治
歌人
明治十年生

金子薫園
名ハ雄太郎
歌人

與謝野晶子
與謝野寛ノ妻
歌人
明治十一年生

前田純孝
歌人
明治四十四年歿
年三十二

平等院　窪田空穗

いにしへの鳳凰堂に夕日さし、照りさびしきを池越しに見る。

水車　金子薫園

牛のゆく白川道の水車かたりことりといとまあるかな。

銀杏　與謝野晶子

金色のちひさき鳥のかたちして銀杏ちるなり、岡のゆふべに。

立春　前田純孝

おのづから眠足らひて乳呑兒が眼ひらくごとく、春は來にけり。

東海日出　齋藤茂吉

齋藤茂吉
醫家
歌人
明治十五年生

ゆら〳〵と朝日子あかくひむがしの海に生れて居たりけるかも。

思出　石川啄木

石川啄木
名ハ一
新聞記者
歌人
大正元年歿
年二十七

飴賣のチャルメラきけば、失ひしをさなき心ひろへるごとし。

雨中櫻　若山牧水

若山牧水
名ハ繁
歌人
明治十八年生

けふも雨ふる、蛙よろこび、しよぼ〳〵に濡れて櫻も咲きいでにけり。

十九日
二條天皇平治元年十二月十九日

一一　光頼卿の參内

さる程に、内裏には同じき十九日、公卿僉議とて催されけり。勸修寺左衞門督光頼卿、この程は信頼卿の振舞過分なりとて、不參にておはしましけるが、參内して承らんとて、ことに鮮かに束帯引繕ひ、蒔繪の細太刀おとなしやかに佩きたまひ、めのとごの桂右馬允範能に、膚に腹卷着せ、雜色の裝束に出でたゝせ、「自然の事もあらば人手にかくな、汝が手にかけて光頼が首をば急ぎ取れ」とて御身近く置き、其の外、清げなる雜色四五人召具して、大軍陣を張りて處々門々を堅く守護しけるを事ともせず、さき高らかに追はせて入りたまへ

ば、兵どもゝ大いに恐れ奉り、弓を平め、矢をそばめて通してまつる。

東帶（裝束着用圖）

紫宸殿の後を經て殿上を廻りて見たまへば、信頼卿一座して、その座の上藹たち皆下にぞ着かれける。光頼卿「こは不思議のことかな。人はいかに振舞

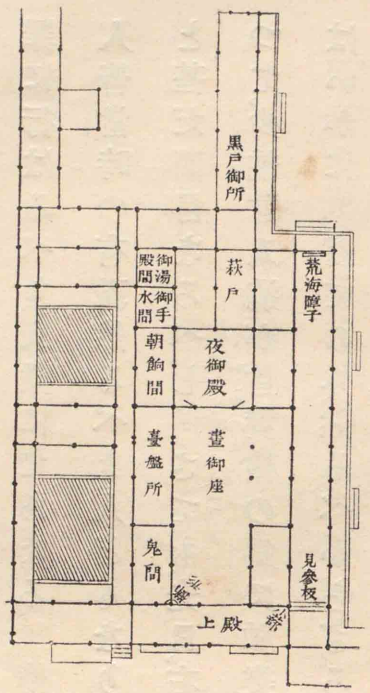
ふとも、かれは右衞門督、われは左衞門督なれば、下には着くまじきものを」と思はれければ、左大辨宰相長方卿末座の宰相にておはしましけるに、「今日の御座席こそよにしどけなう見え候へ」と色代して、しづ〳〵と歩み、信頼卿の上にむずと着きたまふ。

光頼卿は信頼卿のためには母方の叔父なる上、大力の剛の人なれば、殊に恐れて見えられたり。右の袖の上に居懸けられて、伏目になりて色を失はれければ、着座の公卿「あなあさまし」と見たまふに、光頼卿下襲の尻引直し、衣紋繕ひ、笏取直し、氣色して「今日は衞府督が一座すると見えて候。召に參ぜざらん者をば死罪に行はるべしとやらん承りて參内

するところなり。抑、何事の御諚ぞ。」と問ひけれども、信頼卿物も宣はず、着座の公卿も一言の返答なかりければ、まして僉議の沙汰もなし。程經て光頼卿つい立ちて、「悪しう參つて候ひけり。」とて、しづ〳〵と歩み出でられけり。

庭上に充ち滿ちたる兵ども、これを見奉りて、「あはれ、この殿は大剛の人かな。去んぬる十日より多くの人出仕したまひつれども、右衛門督殿の座上に着く人一人もおはしまさざりつるに、しいだしたることよ。門を入り給ふより、聊かも臆したる體も見え給はず。あはれ、この人を大將として合戰せば、いかばかりか頼もしからん。」と申せば、傍なる者の「昔頼光・頼信とて源氏の名將おはしましき、その頼光を打返

して光頼と名のり給へば、これも剛にましますぞかし。といへば、又傍より、「などその頼信を打返して信頼と附き給ふ右衛門督殿はあれほど臆病にはおはしますぞ。」といへば、「壁に耳、天に口。」といふことあり、恐ろし、恐ろし。聞かじ。」といひながら、皆忍び笑ひに笑ひけり。



（内裏圖）

光頼卿の參内

上の小部の前、見參の板高らかに踏みならして立たれたり

惟方
左兵衛督檢非違使別當藤原惟方

少納言入道
少納言藤原通憲
入道信西

けるが、荒海の障子の北、萩戸の邊に弟の別當惟方のおはしけるを招き寄せ宣ひけるは、「公卿僉議とて催されつる間、參じたれども、承り定めたることもなし。誠やらん、光頼も死罪に行はるべき人數にてあなる。傳へ承るごときは、その人皆當時の有職、然るべき人どもなり。その内に入らんこと甚だ面目なるべし。さても、先日、右衛門督が車の尻に乘つて、少納言入道が首實檢の爲に神樂岡へ向はれけることはいかに。以ての外、然るべからざる振舞かな。近衛大將・檢非違使別當は他に異なる重職なり。その職に居ながら人の車の尻に乘りたまふこと、先蹤も未だ聞及ばず、當時も大いに恥辱なり。就中、首實檢は甚だ穩便ならず」と宣へば、

勸修寺内大臣
藤原高藤
三條右大臣
高藤ノ子定方

別當「それは天氣にて候ひしかば」とて赤面せられたり。光頼卿重ねて「こはいかに勅諚なればとて、いかで存ずる旨を一議申さゞるべき。我等が曩祖勸修寺内大臣・三條右大臣、延喜の聖代に仕へてより以來君既に十九代、臣又十一代、承り行ふことは皆これ德政なり、一度も惡事に從はず。當家はさせる英雄にはあらざれども、偏に有道の臣に伴つて讒佞の輩に與せざりし故に、昔より今に至るまで人にさしもどかるゝほどのことはなかりしに、御邊始めて暴惡の臣に語らはれて、累家の佳名を失はんこと口惜しかるべし。大貳清盛は熊野參詣を遂げずして切目の宿より馳せのぼるなるが、和泉・紀伊・伊賀・伊勢の家人等、待受けて大勢にてあ

なる。信頼卿が語らふところの兵そこばくならじ。平家大勢押寄せて攻めんには時刻をやめぐらすべき。もし又火などをかけなば、君もいかでか安穩に渡らせ給ふべき。灰燼の地となりたらんだにも、朝家の御歎なるべし。いかにいはんや君臣ともに自然の事もあらば、天下の珍事、王道の滅亡この時にあるべし。右衛門督は御邊に大小事を申しあはすとこそ聞ゆれ。相構へて〳〵隙を窺ひ、玉體恙なくおはします樣に思案せらるべし。さて主上は何處におはしますぞ。「黒戸御所に。」「上皇は。」「一本御書所に。」「内侍所は。」「溫明殿に。」「劍璽はいづこに。」「夜の大殿に。」と左衛門督次第に尋ね給ひければ、別當かくぞ答へられける。

又、「朝餉の方に人音のし、櫛形の穴に人影のしつるは何者ぞ。」と宣へば、「それには右衛門督住み候へば、その方樣の女房などぞかげろひ候ふらん。」と申されければ、光頼卿聞きもあへず、「世の中は今はかくざんなれ。主上の渡らせ給ふべき朝餉には信頼住み、君をば黒戸御所に遷し參らせたり。末代なれども、さすがに日月は未だ地に落ち給はぬものを、天照大神・正八幡宮は王法をいかゞ守り給ひぬるぞ。異國にはかやうの例ありと雖も、我が朝にて未だかくの如き先蹤を聞かず。前代未聞の不思議かな。」とて、のろ〳〵しげに憚る所なくくどき給へば、惟方は「人もや聞くらん。」とよにすさまじげにて立たれたれども、かつは悲しくて、「われいかなる

宿業によつてかゝる世に生れ合ひ、憂き事をのみ見聞くらん。昔の許由にあらねども、今の内裏の有様を聞かん輩は耳をも目をも洗ひぬべくこそ侍れ。」とて、上の衣の袖絞るばかり泣かれけり。信頼卿の座上に着かせられし時はさしもゆゝしく見えたまひしが、君の御事を悲しみて、打萎れてぞ出でたまひける。（平治物語）

松尾芭蕉
名ハ宗房
又ノ號ハ桃青
俳人
元祿七年（一六九四）
歿
年五十一
石山
近江國滋賀郡石山村

一二　幻住庵の記

松尾芭蕉

石山の奥、岩間のうしろに山あり、國分山といふ。そのかみ國分寺の名を傳ふるなるべし。麓に細き流を渡りて翠微に登ること三曲、二百歩にして八幡宮立たせ給ふ。神體は

彌陀の尊像とかや。唯一の家には甚だ忌むなることを、兩部光を和げ利益の塵を同じうし給ふも亦たふとし。日頃は人の詣でざりければ、いとゞ神さび、物しづかなる傍に、住捨てし草の戸あり。蓬・根笹、軒をかこみ、屋根洩り壁落ちて、狐・狸ふしどを得たり。幻住庵といふ。あるじの僧何がしは、勇士菅沼氏、曲翠子の伯父になんありしを、今は八年ばかり昔になりて、正に幻住老人の名をのみ殘せり。予亦市中をさること十年ばかりにして、五十年やゝ近き身は、蓑蟲の蓑を失ひ、蝸牛の家を離れて、奥羽・象潟の暑き日に面をこがし、高すなご歩みぐるしき北海の荒磯にきびすを傷りて、今年湖水の波にたゞよひ、鴉の浮巣の流れとゞまるべき蘆の

何がし
膳所藩士本多八左衞門
曲翠
芭蕉ノ門人

五十年やゝ近き身
芭蕉ハ當時四十七歳

やがて出でじ
よしの山やがて出でじと思ふ身を花散りなばと人や待つらん

吳楚東南に走り
昔聞洞庭水。今上岳陽樓。吳楚東南拆。乾坤日夜浮。

瀟湘洞庭
惠宗烟雨歸雁。坐我瀟湘洞庭。欲レ喚扁舟歸去。故人道是丹青。

一本の蔭たのもしく、軒端葺きあらため、垣根結ひそへなどして、卯月のはじめ、いとかりそめに入りし山の「やがて出でじ」とさへ思ひそみぬ。

さすが春の名殘も遠からず、躑躅咲きのこり、山藤松にかゝつて、時鳥しば〳〵過ぐるほど、宿かし鳥の便りさへあるを、啄木鳥のつゝくとも厭はじなど、そゞろに興じて、魂は吳楚東南に走り、身は瀟湘洞庭に立つ。山は未申にそばだち、人家よきほどに隔り、南薰、峰よりおろし、北風、海を浸して涼し。比叡の山・比良の高根より、辛崎の松は霞こめて、城あり、橋あり、釣垂るゝ舟あり。笠取に通ふ木樵の聲、麓の小田に早苗とる歌、螢飛びかふ夕闇の空に水雞のたゝく音、美景物とし

三上山
近江國野洲郡ニアル近江富士トモイフ

古人
猿丸大夫墓ハ田上山麓ニアル

海棠に云々
徐老海棠巢上。王翁主簿峰庵。

とく〳〵の雫
とく〳〵と落つる岩間の苔清水汲みほすほどもなきすまひかな

て足らずといふことなし。中にも三上山は士通峰の俤にひて武藏野のふるきすみかも思ひ出でられ、田上山に古人をかぞふ。

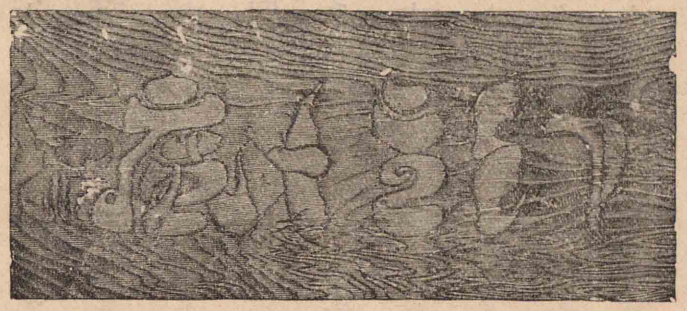
なほ眺望隈なからんと、後の峰に這上り松の棚つくり、藁の圓座を敷いて、猿の腰掛と名づく。かの海棠に巢をいとなみ、主簿峰に庵を結べる王翁・徐佺が徒には非ず。たゞ睡癖山民となりて、孱顏に足をなげ出し空山に虱を捫つて坐す。たま〳〵心まめなる時は、谷の清水を汲みて自ら炊ぐ。とくとくの雫を佗びて、一爐の備いと輕し。

はた昔住みけん人の殊に心高く住みなして、たくみおける物ずきもなし。持佛一間を隔てゝ夜の物を納むべき處な

高良山 筑後國三井郡ニアル

甲斐何がし 藤木甲斐守敦直 賀茂ノ祠官 書家 慶安二年(一六四九) 歿 年六十八

ど、聊かしつらへり。さるを筑紫高良山の僧正は、賀茂の甲斐何がしが子にて、このたび洛に上りいまそかりけるを、或人して額を乞ふ。いと易々と筆を染めて幻住庵の三字を送らる。やがて草庵の記念となしぬ。すべて山居といひ、旅寢といひ、させる器貯ふべくもなし。木曾の檜笠、越の菅蓑ばかり、枕の上の柱に懸けたり。畫は稀々とぶらふ人々に心を動かし、或は宮守の翁、里のをのこども入來りて、猪の稲くひあらし、兎の豆畑に通ふなど、我が聞知ら



幻住庵の額

樂天 唐ノ詩人白居易ノ號 (一四三—一五〇六)

老杜 唐ノ詩人杜甫 (一三七—一四〇)

ぬ農談に、日已に山の端にかゝれば、夜座靜かに月を待ちては影を伴ひ、燈を取つては罔兩に是非をこらす。

かくいへばとて、ひたぶるに閑寂を好み、山野に跡をかくさんとにはあらず。やゝ病身、人に倦んで世を厭ひし人に似たり。つら〳〵年月の移りこし拙き身の科を思ふに、ある時は仕官懸命の地を羨み、一たびは佛籬・祖室の扉に入らんとせしも、たよりなき風雲に身をせめ、花鳥に情を勞して、しばらく生涯の計とさへなれば、終に無能無才にしてこの一筋につながる。樂天は五臟の神をやぶり、老杜は瘦せたり。賢愚・文質のひとしからざるも、いづれか幻の栖處ならずやとおもひ捨てゝふしぬ。

まづ賴む椎の木もあり、夏木立。（猿蓑集）

正岡子規
名ハ常規
俳人
歌人
明治三十五年歿
年三十六

一三　國ざかひ

雪殘る頂ひとつ國ざかひ。　正岡子規

地に落ちし葵蹈みゆく祭かな。

朝鳥の來れば嬉しき日和かな。

獨言、ぬるき湯婆をかゝへけり。

夕月や納屋も厩も梅の影。　內藤鳴雪

矢車に朝風つよき幟かな。

古城は北に聳えて天の川。

元日や、一系の天子富士の山。

內藤鳴雪
名ハ素行
俳人
漢學者
弘化四年（一八四七）
生

高濱虛子
名ハ清
俳人
小說家
明治七年生

山燒の火見えそめぬ、夕霞。　高濱虛子

金龜子擲つ闇の深さかな。

部屋々々に配る行燈や、鹿の聲。

遠山に日の當りたる枯野かな。

一四　世界の四聖 その一

高山樗牛

生れて一代の宗師となり、死して百世の儀表となる。聖人に非ずんば誰かこれを能くせんや。釋迦・孔子・ソクラテス・基督の四人、世呼んで世界の四聖と稱す、宜なるかな。

釋迦は西曆紀元前凡そ六百年の頃、印度伽毘羅國の王家に生る。父は淨飯王、母は摩耶夫人、其の本名を悉達多といふ。

釋迦は伽毘羅王家の族名にして、佛陀は其の出家成道せる後の尊號なり。釋迦、身は一國の太子に生れけれども、夙に思を人生の問題に潛め、二十九の歳其の妻子を捨てゝ王城を逃れ、山林に隱れて道を修むること六年、終に人生の奥義を極め、無上の正覺に徹底せり。爾來五十餘年の間北天竺の各地に巡錫して教化を布き、年八十餘歳にして跋提河の邊に歿しぬ。今の佛教は即ち釋迦一代の教訓に基づく。蓋し釋迦の當時、印度には幾多の哲學ありき。

釋　迦（吳道子筆）

されど徒に思索の高遠を欽びて人生の疑問に適切ならず、偏に幽玄なる談理と慘澹たる苦行とによりて安心の道を求めたり。其の流派を樹てゝ相爭ふ所は畢竟名目上の優劣のみ、未だ一世の元々をして歸命の大道に就かしむるに足らず。釋迦この間に生れ、其の浩大なる慈悲と無邊なる智慧とを以て一世の木鐸となり、民をして其の歸依する所を知らしめたり。

孔子名は丘、孔子は其の尊稱なり。今を去る二千一百餘年の昔、支那の魯國に生る。幼にして學を好み禮を習ふ。壯年の頃より魯國の官吏となり、傍ら子弟を教へて夙に令聞あり、學德愈〻進む。魯の定公の時に至り擢でられて大司寇

の職に就く。治績大いに擧り、內外其の風采を想望す。時に齊王、魯國の日に盛大に赴けるを嫉み、謀を構へ、定公をして孔子を用ひざらしむ。孔子、時運の非なるを見、五十六歳の老軀を挺し、門下の高足を率ゐて四方の遊說を試みぬ。當時の支那は謂はゆる春秋戰國の亂世なり。

孔子（吳道子筆）

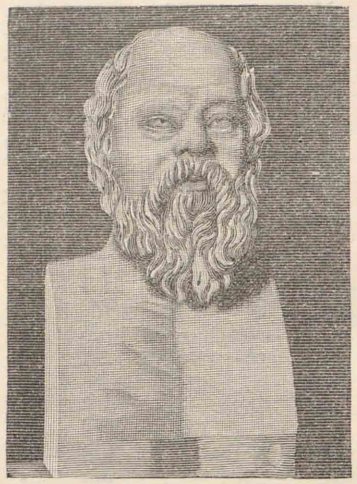
周の王室は名のみにして、君臣の大義は蕩然として地を掃へり。或は臣にして其の君を弑するものあり、子にして其の親を害するものあり。强は弱を食み、大は小を併せ、權力の外に道義あるなし。敎化の陵夷、風俗の頹廢、未だ曾てこ

の時のごときはあらず。孔子既に志を魯に得ず、乃ち慨然として故國を出で、大義名分を天下に唱へて狂瀾を既倒に廻さんとす。その志や高且大なりと謂ふべし。かくの如くにして四方を漂浪すること十三年。時非にして道容れられず、世復耳を名敎に傾くる者なし。こゝに於て已むを得ず老脚蹉跎として再び魯に歸り、歎じて曰く、「嗚呼、吾が道終に窮せり。世終に吾を知るものなきか」と。門弟子貢慰めて曰く、「何ぞ夫子を知るものなからんや」。孔子曰く、「天を怨みず、人を尤めず、下學して上達す。吾を知る者はそれ天か。君子は歿して名の稱せられざるを病む。吾が道行はれずんば、吾何を以てか後世に見えんや」と。幾ばくもなく

歿しぬ。時に年七十三。

ソクラテスは希臘のアテネ府に住める一彫刻師の子なり。其の生れしは凡そ紀元前四百七十年の頃にして、釋迦孔子と年を隔つること二三十年に過ぎず。東西の聖人殆ど時を同じうして世に出でたるは奇なりと謂ふべし。希臘の當時は所謂詭辯學派の跋扈せし時代にして、知識は名目の爭に留り、道德は空文の上にのみ貴ばれたり。其の狀なほ釋迦當時の印度のごとく、人生社會の實際に關しては殆ど裨益するところ無かりき。ソクラテスは慨然として時弊の救濟を以て自ら任じ、盛に道を講じ、理を談じ、諄々として倦まず。詭辯學派の輩に遇へば、則ち其の獨得の論法を以

て辯難攻擊して一歩も假借せず、侃諤の正義、其の稀代の雄辯と相伴ひて一世を風靡せり。然るに、喬木は風に折らるるの喩に漏れず、群小のソクラテスに快からざるもの相謀りて、國法に背けるものとしてソクラテスを讒訴せり。



其の訴狀に曰く、「ソクラテス（ソクラテス）は國教を信ぜずして異教を剏め、以て人心を惑亂せり。國法によりて死刑に處すべし。」と。ソクラテスがこの讒訴に對する抗議は實に壯快を極めたるものにして、慨世憂國の至誠を以て國民に訴ふるところ、語々百世の眞理ならざ

るはなし。然れども、判官はソクラテスを以て傲岸不遜なりとし、死刑を宣告せり。ソクラテス泰然として驚かず、曰く「命のみ」と。其の獄中にあるや、常に其の門弟子を集めて生死・靈魂・未來の事を說き、人の脫獄を勸むるものに對しては、輒ち答へて曰く「予は唯正義に導かれんのみ。死また何するものぞ。人生の幸福は靈魂の上にありと知らずや」と。終に從容として毒を仰いで歿しぬ。將に歿せんとするや、弟子遺言を求む。ソクラテス曰く「爾、一雞を以てアスクレピヤスの神に捧げよ」と。蓋し曾て病みし時、平癒を祈りて謝を致すことを忘れしなり。希臘の聖人ソクラテスはかくの如くにして逝きぬ。年七十。

基督は本名を耶蘇といふ。基督とは「膏灌がれたる者」といふ義にして、教徒の奉りたる尊稱なり。猶太のベトレヘムに生る。西暦紀元第一年は其の生後四年に當れり。父はヨセフと呼べる賤しき木匠にして、母の名をマリヤといふ。長じて三十歳の頃豫言者ヨハネの洗禮を受けて始めて傳道の生涯に入り、爾來三年の間猶太の各地を歷游し、諸の迫害に屈せずして其の福音を傳へたり。當時羅馬帝國は榮華已に其の極に達し、禍亂の萌芽其の中に胚胎し、災異荐に至りて天下寧日なし。殊に基督の故國たる猶太は久しく暴君の收斂に疲れ、異邦人の侮慢を被れり。民衆は徒に珍奇の淫祠を崇拜して益〻放縱の俗に流れ、學者は詭辯を弄び

て空しく人を惑はすのみ。こゝに於て、一世の人心は觖焉として偉人の現出してこの暗黑の社會を照破せんことを渴望せり。基督この間に生れ、自ら救世の使命を負へる神の子なりと稱し、昂然として其の偉大なる新教理を宣傳せしかば、遠近靡然としてこれに赴く。僧侶・學者・官吏等これを喜ばず、猥に新法・異說を唱へて民を惑はすものなりとなし、基督を捕へて磔殺の刑に處す。基督豫め此の事あらんことを慮り、晏然として騷がず、靜かに

基督

祈りて曰く、「神よ、彼等を赦せ。彼等は其の爲すべき所を知らざれはなり」と。其の刑場に赴くや、路傍に哀哭する女子を顧みて曰く、「イェルサレムの女子よ、我が爲に哭くなかれ。唯己と己の子との爲に哭け」と。かくの如くして、基督は三十三年を一期として十字架上の露と消え去りぬ。基督死して後、其の弟子等は激烈なる迫害に抵抗して其の教を天下に弘めぬ。基督教即ち是なり。

以上は四聖の略傳なり。其の人物・事蹟の高大にして雄偉なる、永く後人の景慕し、崇拜すべき所なり。而して、四聖の中釋迦を除きては、いづれも轗軻不遇の間に其の生を終へたり。孔子は志を四方に得ず、其の經綸を抱いて空しく詠

歎の間に歿せり。ソクラテスと基督とはいづれも讒人の手に罹り、或は毒を仰ぎ、或は盜賊と並びて十字架上に釘殺せられたり。慘澹たりと謂ふべし。然れども是等の人々の志す所は天下後世にあり。現世の禍福と一身の安危とは毫も其の顧慮する所にあらず。故に其の死に就くや、晏如として恰も歸するが如し。孔子は其の一身の不幸を憂へずして、却て「わが道行はれずんは、吾何を以てか後世に見えんや」と嗟嘆せり。釋迦は衆生のために其の妻子と王位とを抛ちて食を路傍を乞へり。ソクラテスは死罪の脅迫に遇うて揚言して曰く、「正義を信ずるものに取りて、死はた何するものぞ。吾をして一日の生あらしめんか、其の一日即ち國民の迷を覺さゞるべからず」と。基督は己を罪に陷るゝものゝために神に祈りたり。嗚呼何ぞ其の慈悲の浩大にして無邊なるや。

一五　世界の四聖　その二

高山　樗牛

四聖は其の生れたる處と時とを異にす。故に其の教理にも亦多少の差違なきを得ず。今其の大要を擧ぐれば左の如し。

釋迦の教理は煩惱を斷滅して涅槃に達するを主旨とす。夫、人生は苦に始りて苦に終る。生・老・病・死いづれか苦にあらざるべき。故に吾人は現世を苦界と觀ぜざるべからず。

身を修め

古之欲レ明二明德一於天下一者先治二其國一。欲レ治二其國一者先齊二其家一。欲レ齊二其家一者先修二其身一。欲レ修二其身一者先正二其心一。欲レ正二其心一者先誠二其意一。

而して苦の原因は情慾にあり。情慾の原因は「我」の一念にあり。故に吾人は「我」の一念を脱却して無我無念の境界に達せざるべからず。是、人生究竟の樂地にして、涅槃即ち是なり。

孔子の教は身を修め、家を齊へ、天下を治むるにあり。而して身を修むる基は孝にあり。故に孝は百行の本なり。君臣の義、父子の親、夫婦の別、長幼の序、朋友の信、皆之に基づく。人は生れながらにして美德を天に稟くれども、後天の氣質によりてこれを完うする能はざるもの多し。教育の要こに於てかあり。既に教育を受けて身既に修らば、家自ら齊ふべく、家齊はゞ、國自ら治るべく、國治らは、天下自ら太平なるを得べし。故に孔子の教は一身の修養に始りて治國・平天下に終るものと見るべし。

ソクラテスの教は所謂知德合一說なり。謂へらく、「眞正の知識は即ち道德なり。故に行ふと知るとはもと一體のみ。知つて行はざると行うて知らざるとは共に知識道德の眞正なるものにあらず。眞理を確信し、其の實行を以て最上の義務となせば、正義自ら其の中にあり。正義は靈魂の滿足なり。而して靈魂は肉體と異にして不朽不滅なるものなり。故に吾人の正義を行ふや、現世の利害は決して顧慮すべきにあらず。道德は富貴のために存せず、然れども富貴は道德の中に在り」と。

山上の垂訓
基督ガ猶太ノ祝福ノ山デ授ケタ教訓
新約全書馬太傳五六七ニ出テヰル

基督の教は愛の教なりと稱せらる。所謂山上の垂訓は三年傳道の極意を包括するを以て、左に其の大略を擧げん。

曰く、「心の貧しき者は福なるかな、天國は其の人の有なればなり。悲しむ者は福なるかな、其の人は慰められるべければなり。飢ゑ渴く如く義を慕ふ者は福なるかな、其の人は飽くことを得べければなり。憐む者は福なるかな、其の人は憐を得べければなり。心の清き者は福なるかな、其の人は神を見るべければなり。惡に敵するなかれ。人若し汝の右の頰を打たば、左の頰をも轉らしてこれに向けよ。汝の隣人を慈しみて汝の敵を愛せよ。人に見せんがために義を其の前に行ふなかれ。汝等施をするとき右の手に爲す所を左の手に知らしむるなかれ。隱れたるを鑒み給ふ神はあらはに報い給ふべければなり。人は神と財とに兼ね事ふること能はず。人を是非するなかれ。人の目にある塵を見ながら、何ぞ己が目にある梁木を見ざる。汝等求めよ。然らば與へられん。尋ねよ。然らば遇はん。門を叩け。然らば啓かれん。窄き門より入れ。沈淪に至る路は濶く、其の門は大きく、これより入る者は多し。嗟呼、いかに生命に至る路は窄く、其の門は小さく、其の路を得る者の少きぞや。凡そこの訓を聽きて行ふ者は磐の上に家建てたる智者の如く、聽けども行はざる者は沙上に屋を架せる愚人の如し」と。基督教の精髓は、後世の人如何なる色彩を加

ふとも、實にこの山上の垂訓を基とせざるを得ず。

嗚呼、四聖逝いて既に幾千年ぞ。而してこの教の今なほ凜凜として生氣あるを見よ。世界累代の幾億兆の民衆は、この教に憑りて道念を養ひ、其の安慰を求む。四聖の如きは實に人類の永遠なる救濟者なりと謂ふべし。其の遺德の高大なること何を以て是に比せんや。（樗牛全集）

一六　明治時代の文學

佐々醒雪
名ハ政一
國文學者
文學博士
東京高等師範學校教授
大正六年卒
年四十六

維新の偉業正に成りて開國の國是一たび定るや、世間は西洋の物質的文明の輸入に急にして、和漢の學術・技藝を顧みるに遑あらざりき。況や美術・文藝のことの如きは全く無用の長物とせられて、幾多の國寶は破棄せられ、無數の古典は廢紙となりぬ。此の間にあつて纔に微光を存せしものは獨り新聞紙なり。

新聞紙の刊行は、これを西洋に學びしものにして、當初は專ら政治論の機關たり、實用功利の論に非ざれば、以て時代思潮に追隨するに足らずとなしたりき。されど普通教育の制度漸く國内に普くして、文學の知識が中流以下の社會に擴張せらるゝと共に、新聞紙の經營者も亦此等の讀者に對して其の娯樂となるべき文藝の作物を供給せざるべからざるを知りぬ。かくて、幕末以降久しく失意の地にありし戲作者が所謂續き物と稱する合卷風の小説を紙上に掲げ

佳人ノ奇遇　東海散士柴四朗著
雪中梅　鐵腸末廣重恭著
經國美談　龍溪矢野文雄譯

初めしは、蓋し明治文學の萌芽なり。

從來筆を政治論にのみ執りたりし人々も、此の種の文藝の人心に影響することの速なるを認めて、或は英佛の政治小說を翻譯し、或は新に架空の脚色を立てゝ自家の主張を具體的に說明せんことを企てたり。佳人の奇遇・雪中梅・經國美談等は當時最も喧傳せられしものにして、慷慨激越の調、時に青年者流を感奮興起せしむるものなきにあらざりしかど、その豪放粗大の文は未だ人情の機微に入らず、眞に文學の眞諦を得たるものといふに足らざりき。

さもあれ、明治は既に十七八年を經たり、西洋の學術も技藝も稍〻咀嚼せられたり。世の先覺者はかの徒に物質の皮相にのみ腐心するの愚なるを悟りぬ。文藝・美術の評價も日に漸く高からんとせり。この勢に乘じて、坪內逍遙等が文學論の出づるあり、硯友社一派の新に旗幟を樹つるあり、在來の戲作者系の人々もこれに呼應して立てり。こゝに謂はゆる才筆家にもあらず、政論家にもあらず、熱誠なる態度を以て直に人生を描破せんとする者は、將に踵を接して出でんとせるなり。

思ふに新文藝の勃興は半ば西洋文藝によりて啓發せられたり。されども他の一半は我が國の古文學に淵源せるものなることを忘るべからず。蓋し維新以來萌し來れる西洋文明謳歌主義は此に其の極に達して、その反動たる國粹

保存論は盛に唱道せられ、國語教育の奬勵、古文學の研究が隆昌を極めしはあたかもこの頃なりき。されば新文藝の先達は、啻に西洋の文學のみならず、我が國の古文學に回顧し、或は中古の文學に私淑するあり、或は元祿文學に摸倣するあり。我が文壇の泰斗として新篇出づる毎に洛陽の紙價を貴からしめし尾崎紅葉と幸田露伴とは、ともに西鶴を學びてその新文體を創めしものなりき。

紅葉が艶麗の致は才人の情緒を寫すに長じ、露伴が遒勁の調は巧に男兒の意氣を描きぬ。されど、その題材は稍、單調なりき。良、久しうして世間はその反復に倦みぬ。乃ち變化を求めて、或は探偵小說・冒險小說・俠客小說等の複雜なる脚色に喝采し、或は慘澹たる事件を敍したる所謂觀念小說、悲痛なる苦悶を抒べたる所謂心理小說を歡迎し、或は神怪不可思議なる妖怪談、或は淫靡不道德なる戀愛談と、幾度か流行は變遷しつゝ、その取材は日に〳〵人生の暗黑面に向つて進み去らんとせり。その間或は光明小說といひ、家庭小說と號する道德的傾向ある作物の行はれしものなきに非ずと雖も、皆膚淺陳套、未だ人心の要求をみたし、人生に理想を與ふるものにあらざりき。

この時に方りて、東洋の一小島國は日清・日露の大役を經て、俄然として一等國の伴に伍せり。戰勝に醉ひし豪奢の餘弊と避け難き財政上の壓迫とは、我が國民が生活難の聲と

して青年の耳朶に響きぬ。顧みれば、嘗ては文藝の形式をのみ評論したりし批評家は漸く人生の研究に轉進し來りて、或は高山樗牛が美的生活論となり、或は綱島梁川が見神說となり、或は自然主義といひ、無理想・無解決と呼び、在來の一切の教權を放下すべしとさへ說く者あるに至りぬ。既に生活難の聲に慄ける青年は、徒に多岐に惑ひて唯煩悶するあるのみ。而して所謂自然派の小說は、益〻人生の暗黑面を誇張して、好みてかの悶々して焦燥し、狂奔し、疲憊困頓蹌蹌跟々たる敗殘の青年を描きつゝ以て人生の實相を盡したりとなせり。煩悶せる者が暫くこゝに同情者を得たるが如く感ぜしは、蓋し一時の迷想のみ。今や世間は漸く混

桂園　香川景樹ノ號
蒼虬　成田氏　俳人。天保十三(一八四二)歿　年八十三
梅室　櫻井氏　俳人　嘉永五年(一八五二)歿　年八十

沌たる思想界を出でて、更に高く更に深き人生の眞意義を捉へんとして、倫理に、哲學に、宗教に、文藝に、秩序ある討究を重ねんとせり。思ふに、我が小說界が崇高偉大なる理想に逢着して更に向上の一路を發見すべきは甚だ久しからざらんとするなり。

上來、主として小說の變遷を敍したり、最近の文壇に於て最も注目すべきはこの種の文藝なればなり。さもあれ、上古以來常に流行し來りし抒情・敍景の小詩形も亦甚だ衰へたるには非ず。

歌道には桂園の流を汲む者多く、俳道には蒼虬・梅室の門派のみ獨り盛にして、和歌・俳句といへば、專ら活社會と交渉な

き閑人・隱者の間に行はれしもの、明治初年の大勢なりき。かの國粹保存論、國文學の研究等盛なりし時に至りて、落合直文等とその門下生との手によりて、歌道はまづ青年社會に入り來りぬ。かくて偏に風雅を生命とせる月花の天地を小なりとして、活社會の人生を歌はんとする傾向を生ぜり。俳道には正岡子規出づるあり、天保の俗調を排して清新なる天明調を復活せしめ、更に進みて淡々たる寫實の妙趣を鼓吹し、唯俳句のみならず寫生文と稱する小品文の流行をも促しぬ。この流より出でて筆を小說に着けたるものに夏目漱石等あり。

この他、明治の新文藝としては別に新體詩あり。當初は故

外山博士
名ハ正一
文學博士
明治三十三年薨
年五十三

福澤雪池
福澤諭吉
福地櫻痴
名ハ源一郎
新聞記者
明治二十九年歿
年六十六
成島柳北
新聞記者
名ハ弘
明治十七年歿
年四十八

外山博士等が新體詩抄の調なりしが、その詞藻の稍〻乾燥なるに慊焉たる者は、或は中古語を以て西歐の詩趣を傳へんとするあり、或は漢語を用ひて五七の單調を破らんとするあり。中頃島崎藤村が溫雅優美の調、土井晚翠が縱橫跌宕の風、最も青年の間に喜ばれたり。今や、新詩の格調日に新なりと雖も、或は險怪、或は蕪雜、未だ雄渾偉大にして、眞に國民の詩歌と稱するに足るものあらざるに似たり。

更に純文藝の範圍を出でて專ら一代の文章の模範となりしものを求むるに、かの漢文直譯風の文章が流行したりし日に於ても、既に福澤雪池・福地櫻痴・成島柳北等の平易明快なる文字あり。降つては、三宅雪嶺・坪內逍遙・森鷗外・高山樗

牛・大町桂月等あり。その文各〻特色あり、長短ありと雖も、皆縱横自在にして言はんとする所盡さゞるはなし。現代の所謂普通文は純文藝の著作よりも、寧ろ此等の人々の筆致に負ふ所多きに似たり。

あはれ明治の時代はあらゆる方面に於てげに偉大なる時代にてありけり。この偉大なる事業を繼承し、更に大いにその精神を發揮せしめんものは、實に大正の時代ならざるべからず。大正文學の前途も亦多望なりと謂ふべし。

三宅雪嶺
名ハ雄二郎
哲學者
評論家
文學博士
萬延元年(一八五〇)生
大上有立德
左傳ニ出テキル
穆叔ノ語

一七　人生の快事　その一

三宅雪嶺

支那に三不朽の說あり。「大上有立德。其次有立功。其次有立言。雖久不廢。此之謂不朽」と曰へるもの是なり。言古しと雖も、其の意は今に新なり。世界に其の例を擧ぐれば、孔子・釋迦・耶蘇の如きを立德とし、該撒・奈破崙の如きを立功とし、ホーマー以下の文學者を立言とすべし。この三不朽を智仁勇の達德に配當せば、立德は仁、立功は勇、而して立言は智なり。立功にも智を要し、立言にも勇を要すれど、主要なるものを擧ぐれば各〻特色あり。中に史的の意義ありて現代に認むるを難んずるは、立德なり。現に立功家及び立言家の少からざるに、稱して立德家とすべきものを何處に見るか。立功及び立言は全く現實の事にして、過去にもあれば、現在にもあり、將來にもあるべく、立德の漠然たるが

文帝　曹丕（八四七—八六六）

ヴォルテール　佛國ノ歴史家（1694—1778）

如くならず。今は立德の形跡あるものも、立功と立言との孰れかに屬すべきが如し。三不朽の中、立德は人の欲求する所の絶頂にして、聖たり佛たるは人生第一の快事なるかに考へらるれど、箒木の如く之を求めて遂に見失ふに終らん。現代の人の志す所は立功ならざれば立言なり。魏の文帝曰く、「年壽有時而盡、榮樂止於其身。二者必至之常期、未若文章之無窮。」と。是、文事に與る者の期せずして考へ及ぶ所にして、「筆は劍より强し。」といふも、其の旨相近し。ヴォルテール曰く、「功名心あるものにして悉く目的を達し得べくば、悉く文字の人となるべし。」と。ホーマーは傳明かならざれど、傳說に依れば、琴を携へて人の門前に立ち、且謠ひ

司馬相如　漢ノ詩人　紀元五百年代ノ人

左思　晉ノ文人　紀元九百年代ノ人

杜少陵　唐ノ詩人　名ハ甫（一二六九—一四三〇）

且語れる者なりきといふ。明を失ひしか上門附の如く絃歌して錢を乞ひし者ならば、苦痛なる生活を送りしなるべきに、後世之を歎美して已まず、彼の如くんば死すとも可なりとするもの多し。凡そ苦心慘澹の甚だしきこと、詩人の句を撰するが如きは少し。司馬相如の子虛賦、左思の三都賦、辭を練るに全力を用ひき。杜少陵が「爲人性癖耽佳句、句不驚人死不休。」といへる、眞に實狀なり。幾多詩人中には、强ち人を驚かさんとせず、或は之を喜ばしめんとし、或は之を悲しましめんとし、或は之を別乾坤に導かんとするもあるべけれど、要するに皆多少目的を達する所に愉快を感じ、洛陽の紙價を貴くせる時、誠に大勝利を得たる如く悅びたる

人間知己少
村上佛山ノ句

賈誼
漢ノ文人
（紀元前一―四九三）

蘇軾
宋ノ文人
（一六九六―一七八一）

マコーレー
英國ノ歷史家
（1800―1859）

カーライル
英國ノ歷史家
（1795―1881）

ならん。己の以て絶佳とする所、人全く解せず、外に出でて衆に笑はれ、内に入りて米鹽に窮する時、若し猶自ら信ずること篤くば、當世に屈して後世に伸ぶるあるを以て慰めたるなるべし。又實に當世に屈して後世に伸ぶるものあり。「人間知己少、破硯是良朋」といへるは知己の少くして愈得意を感ぜるなり。

賈誼・蘇軾の策論は正しく立言なり。世に論文と稱するは皆然り。論文といふも全篇悉く議論より成るとは限らず、或は議論を敍事の間に挿むあり、或は議論を挿まずして自然に主張たるあり。マコーレーの英國史は歷史にして自由主義を鼓吹し、カーライルのフレデリック傳は傳記にして人格の堅實を奬勵せるなり。東洋の史傳は皆多少主張あり。爲に史實を枉ぐとの非難あれど、史實を枉げずして主張するを得ずとは謂ふべからず。

ミケランジェロ
伊太利ノ畫家
彫刻家
（1475―1564）

形を異にして實を同じくするは、詩と藝術、文學と科學なり。「言は意を盡さず、文は言を盡さず」といへり。立言は卽ち立意にして、凡そ目的を達し得るものは宜しく立言と見るべし。藝術家の製作に從事するは樂しきか、樂しからざるか。樂しくとも、世間の想像する所とは同じからじ。ミケランジェロの工場に入りし者は彼の努力に驚かざるなし。夜更けて眠りしかと思へば、突然起きて頭に蠟燭を翳し、着手しつゝある製作に從事す。シスト禮拜堂の天井畫を完成

ダーウィン　英國ノ生物學者（1809—1882）
シェクスピヤ　英國ノ戲曲家（1564—1616）
アルキミデス　希臘ノ數學家哲學家。（�287—212頃）

せし時、絶えず仰ぎ居りしが爲に頸が曲らざりきといふ。上下に重んぜられて、生活も豊かなりしが、肉體の滿足を事とせず、繪畫及び彫刻に汲々たりしは、苦心慘澹の間に漸く理想に近づく愉快の禁じ得ざるものありしに因りてなり。科學家は天地の美を讃歎せず。世間に美として讃歎する所も、嚴密に分解し、眼中美もなく醜もなし。ダーウィンは自ら歎じて曰ふ「吾はシェクスピヤを讀みて少しも興味を感ぜず」と。初より感ぜざりしにあらず、生物の研究を專らにし、遂に之を感ぜざるに至りしなり。アルキミデスは兵卒に襲はれし時、正に沙上に幾何學の圖を描きて一意研究しつゝあり。兵卒を顧みて曰ふ「暫く待て。問題を決せん」。

英雄何必讀書史　清ノ鄭　橋ノ句

と。言ひ終らずして殺さる。傳説にてはあれど、科學家の研究に專らなること往々此の如きものあり。眞に研究を念とするものは、必ず別に樂しむ所あり、常人の樂しむ所と異なり。稱して樂しむといふべからずんは、他の何物にも代ふべからざる方針を取りて進みつゝありと謂ふべし。

一八　人生の快事 その二

三宅　雪嶺

「英雄何必讀書史」とは單に東洋のみならず、何處にも言ひふるしたることなり。泰平無事の日には斯く考ふる者多からざれど、警報傳はりて多少世間の動搖する時には、風雲に際會すといふを事實にせんと欲し、曰く「大丈夫當に屍を馬

革に裏むべし」曰く「男兒當に天下に横行して富貴を取るべし」と。出でては將、入りては相、若し之を併せ得ること困難ならば、せめて其の一を得るの愉快なるべきを思ひ、軍人たらんか、政治家たらんか、遠きは歴山（アレクサンドル）、近きは奈破崙、人生れて彼の如くなるを得ば、萬死して憾なしとす。其の何が望ましきかと問へば、言ふまでもなく天下を掌にし、事として意の如くならざるなきに在れど、彼等果して世人の想像するが如く愉快を感じたりしか。歴山は天眞爛漫、直情徑行、一切の僞善を憎み、波斯に遠征して波斯の歡樂に耽りしに似たれど、彼は苟も無道といふを敢へてせず。當時の社會情態より考ふれば、身を律するの嚴なりしを認めざる能はず。

彼の愉快を感ずるは富貴に在らず、無上の權を振ふに在り。歳三十にて殂し、能く彼の如きを致したるは偶然にあらず。奈破崙の幸福なるは十七歳までなりといふものあるは、即ち爾後野心に驅られて東奔西走し、一日も心の安寧を得ざりしを指すなり。されど奈破崙の愉快を感ぜるは、安樂の生活より寧ろ南征北伐の間に存せしにあらずや。肉體に苦痛あれど、己の力を伸し得る處に滿足を感じたるならん。彼は一種の理想に生き、之に近づくを以て滿足せしもの、その羅馬を模範とし、世界の地圖を改め、永遠の平和を計れる、實に時代を超越せる觀あり。衣囊にホーマーを置き、劍を以て世界を切從へんとの抱負を遂行せんとし、胸中の悶々

たる時には涌くが如き智略とアルプスを拔く勇氣とに快感を覺えたるべく、遠洋の孤島に流さるゝや、居常鬱々たりとはいへ、自ら古の英雄に比較して滿足を感ぜるものゝ如し。彼は不可能を追求して智囊を絞りし爲に何の邊まで人智を働かし得るかを示し、英雄の古代に限らず、後世の古英雄を凌ぐものあるを證明せり。

青年の功名に急なるものは、政治家たらんことを希望するもの多し。何れの國にも法政の學を修むるものゝ多きは、官吏となり、銀行會社員となる外、比較的功名心を滿たすべき門戸の開かれ居るが故なり。山高ければ麓廣し。高き位置にあるが故に麓に集る者甚だ多し。されど高き位置

ピット
英國ノ政治家
(1759—1806)

カヴール
伊國ノ政治家
(1810—1861)

に上れる政治家に何の快樂あるかといへば、世俗の所謂快樂を得ることは少し。後世に欽慕せらるゝ者は、特に然り。奈破崙に對抗して英國の權威を維持せしウィリヤム、ピットは獨身にして、國家を以て妻とすと稱し、收入を擧げて政治の事に投じ、爲に負債山の如くなりき。伊國の建設に當り、獨り國政の整理に任ぜしカヴールは、同じく國家を以て妻とすと稱せり。大いに富み大いに驕らずんば高き位置を占むる効なしといふ者あれど、かゝる事に歡樂を求むる徒は政界に飛ぶとも僅に蝙蝠の飛ぶが如し。大政治家の愉快は、我が施設の効顯れ、幾分にても國家社會の進善せんとするを見るに在り。古代には諸葛孔明の如き、マルクス、

アウレリウス
羅馬ノ皇帝
(121—180)

バリッシ
佛國ノ陶工
(1510頃—1589)

アウレリウスの如き傑出せるものありき。

器械の應用は近世に入りて加速度の進歩を遂げ、商業・工業・農業は之が爲に重きを加へ、嘗て立功家として軍人及び政治家を推したるもの、今は之に商業家・工業家・農業家等を加へざるべからざるに至れり。貧困は發明に必要ならず、富みて新工夫を運らしゝあり、貧困を忍びて成し遂げし事業の價値の少きもあれど、新發明・新工夫の記錄は、半面より觀て貧困との爭鬪なり。パリッシの如きは一の極端なる例とすべし。實際に於て、勇者は世に益すること多きにもせよ、後人を感奮し、努力せしむるは、一切を放擲して事に專らなるものゝ傳記にして、事業としての直接利益の外、間接に人心に益する所多し。「彼も人、我も人、我豈彼の如くなるを得ざらんや」と後人の發憤するは、富貴にして歡樂に耽る所に在らず、己の爲すべきを信じ、斃れて後已まんとする所に在り。爲に人は往々立德の事に考へ及ぶ。

帝王は一世の尊、而も孔子の廟に跪き、釋迦の寺に跪き、耶蘇の會堂に跪けり。個人の勢力にして最も廣く最も久しく影響の及ぶべきものを擧ぐれば、かく帝王を跪かしむる立德家なりとすべく、隨つて志の大なる者の、以て人生の最大快事とするは之に彷彿たるに在り。されど、彼等がたとひ能く立德家の如くなるを得たりとて、果して愉快なるを得べきか。功名心の熾なるものは後世に於ける勢力の孔子・

釋迦・耶蘇の如くなるを欲しつゝ、現在に於て孔子・釋迦・耶蘇の如き不遇又は不快なる生活を送るを欲せざるべし。もと立德は人生の美點を綜合して考へたるもの、人生の完成を以て衆德を具ふるにありとし、暫く史的人物を藉りて之に充つるのみ。人生最上の目的は立德なりと雖も、立德家たらんには如何にせば可なるかといへば、容易に解答を與へ難し。分け登る麓の路は多けれど、同じ高嶺の月を見る。立德は高嶺の月なり。而して麓の路の最も主要なるものは實に立言及び立功に在り。立言に種類あり、詩あり、文あり、藝術あり、科學あり。立功に種類あり、軍事あり、政治あり、商業あり、工業あり、農業あり。之を細分すれば頗る多數に

上るべけれど、其の孰れかを念とし、十分にその能力を伸さば、幾許か立德たるを得ん。

高山の絶頂は寒冷にして風强く、久しく居るに堪へず。而も健脚なるものは、麓にありて百花の咲亂るゝを觀て滿足せず、必ず蒼空を凌がんことを期す。歡樂は麓にあり、安樂は麓にあり、日常の愉快は悉く麓にあり。されば他人より身體の强健にして女兒の樂しむ所の外に出でざるは、聊か物足らず覺ゆべく、時に餓を忍び、寒に堪へ、絶頂に至りて千里一望の快を恣にせんとす。或はアルプスを低しとし、全く人跡を絶てるヒマラヤ山に登らんと企つ。而して若し幸にその上に立たんか、千古の氷雪萬里に亙るを見て、壯絶

快絶壯絶々を叫ばん。女兒も之を聞いて地球の最高處に立つの如何に愉快なるかを想像し、唯己の企て及ばざるを歎ぜん。蓋し形而下の快事は多數の求むる所にして、形而上の快事は少數の求むる所なり。而も求むると求めざるとの差こそあれ、形而上の快事を以て人生の最大快事なりと認むるは古今に通じ東西に亙りて動かすべからざる事實なり。（日本及日本人）

中學 國文教科書 卷十 終

文部省檢定濟

大正十二年十一月十六日　中學校國語科教科書

明治三十九年十月十五日印刷
明治四十年十一月十八日發行
明治四十三年十一月廿五日修正再版發行
明治四十四年十一月廿八日修正四版發行
明治四十五年十二月廿三日修正八版發行
大正元年十二月廿三日修正九版發行
大正三年十一月廿八日修正十版發行
大正四年十一月廿五日修正十一版發行
大正六年十一月廿八日修正十二版發行
大正七年十一月廿五日修正十三版發行
大正十年十一月廿八日修正十四版印刷
大正十一年十一月十七日修正十四版發行
大正十二年十月十八日修正十五版印刷
大正十二年十月十八日修正十五版發行

著作權所有

編者　東京市小石川區高田老松町五十二番地　吉田彌平

發行兼印刷者　東京市神田區通神保町六番地　上原才一郎

發行所　東京市神田區通神保町六番地　光風館書店（電話本郷大手七三四〇番）（振替口座東京三二七番）

定價	大正十四年度臨時定價
卷一・二 各金壹圓七錢	金六拾七錢
卷三・四 各金壹圓四錢	金六拾一錢
自五至十 各金壹圓六錢	金六拾五錢

中學國文教科書全十冊

本館發行の教科書は常に多數の製本準備有之候につき萬一各地賣捌所に賣切等にて課業に御差支の節は直接御注文被下候はゞ直に御送附可致候

（東京秀英舍印刷）

光風館發行國語科教科書

師範學校	國文教科書	東京高等師範學校教授 吉田彌平編	本科用全六冊 第二部用全一冊
中學	國文教科書	東京晉樂學校教授 高野辰之編	修正十五版 全拾冊
女子	國文讀本	東京高等師範學校教授 東京帝大文學部助教授 文學士 保科孝一編	訂正再版 全十冊
實業學校	國語教科書		修正五版 全八冊
	現代文新鈔	東京高等師範學校教授 吉田彌平編	修正四版 全五冊
	太平記鈔本	東京高等師範學校教授 吉田彌平編	再版 全壹冊
	平家物語鈔本		再版 全壹冊
	增鏡鈔本		再版 全壹冊
	保元平治物語鈔本		再版 全壹冊
	神皇正統記鈔本	佐藤正範編	再版 全壹冊
	徒然草鈔本	光風館編輯所編	四版 全壹冊
	常山紀談鈔本		再版 全壹冊
	時文小編		再版 全壹冊
	義經記鈔		再版 全壹冊
	方丈記講本		一版 全壹冊
	十六夜日記講本		一版 全壹冊
	花月草紙鈔		再版 全壹冊
	益軒文鈔		再版 全壹冊
	古今文選	立教中學校教諭 諸星寅一編	再版 全壹冊
類選	徒然草讀本		再版 全壹冊

広島大学図書
2000302017